

「ヤクタタズ！」

フルカワ トシマサ

## 作品概要

「ヤクタタズ！」

二幕 四場

2016年7月26日に、発生した「相模原障害者施設殺傷事件」  
をモチーフにした作品です。

私にとって初めての戯曲作品です。

戯曲の体裁が整っているのか、いさか疑問ですが、  
演劇というより舞台芸術作品の為のテキストを念頭に創作しました。

私の頭の中の映像イメージをつなぎ合わせ、  
セリフという言語表現を模索しながら、  
ストーリーを開拓しています。

あと、文字の大きさや色などを駆使して、  
ヴィジュアル的イメージからも、  
迫ってきたいと考えました。

今回の作品は、テーマも含め、どのような観客を想定するかが、  
結構、苦労しています。

ラスト近くは、なんだか、私の妄想のような気もしますので、  
はたして、現実化できるのかが、心配であり、楽しみでもあります。

あと、合成音声やスマホの使用は、  
あまり詳しくないので、いさか、心配です。

以上

フルカワトシマサ

「ヤクタタズ！」

二幕 四場

—プロローグ—

「闇の手紙」

プレゼンター+A（影）

第一幕 第一場

「路傍にて」

盲の女・聾の男・背の低い男・車椅子の男

第一幕 第二場

「ゲーム」

登場人物 1～6

—休憩—

第二幕 第一場

「アサイラム」

理事長（プレゼンター）

施設長・職員 A・B・C／婦長・看護婦 A・B・C

第二幕 第二場

「最後の晩餐」

登場人物全員

—エピローグ—

「劇場」

—プロローグ—

## 「闇の手紙」

舞台中央に、  
巨大な、真っ白な円柱が、  
天井まで、そそり立っている。

舞台上に、スティーブ・ジョブズの亡靈が、  
忽然と現出する。

以下のプレゼンテーションを、始める。

「一年間、私は、この日が来るのを待ち続けていた。

すべての真相を、この場所で明らかにできることがこの上もない喜びである。

普通で、当たり前であること、正しくて、美しいこと。

それが、一度でも正確に伝えることができれば、幸運である。

そして、この物語は、私に届いた1通のメッセージから始まる。」

スマートフォン（実は、フェイク・カード）を取り出し、読み始める。

合成音声が、重なり始める。

プレゼンター、観客に背を向け、  
柱の中心に向かって、無言で歩み出す。

プレゼンターの背中のみが浮かび上がる。

前略、才父サン、私ハ、今、身体ノ奥カラ満チ溢レテクル歎ビニ全身ヲ奮ワセテオリマス。コノ様ナ想イヲ才父サンニ伝エル事ガ出来ル事ニ、コノ上モナイ幸福ヲ感ジテオリマス。先程、トテモ激シタ立ガアリマシタ。耳ヲツンザク雷鳴ガ轟キ、バケツヲヒックリ返シタヨウナ雨デ目ノ前ガ真ッ白ニナリマシタ。私ハ、ソノ場所デ全テニ背ヲ向ケテ立チ尽クシティタノデス。ドレ程ノ時間ガ経ッタノデショウカ。フト氣ガ付クト、ビッショリト濡レタ服ガ皮膚ニ纏ワリ付キ、冷タサダケヲ感ジテイマシタ。焼ケ焦ゲタ臭イガ、鼻ノ奥ニ残リ、真ッ赤ナ血ノ味ガシマシタ。イツノ間ニ力私ハ、唇ヲ噛ミ締メテイタノデス。ソノ瞬間身体ノ奥ニアル熱イ塊ニ身ヲ委ネル私ヲ発見シタノデス。今ハ、優シイ闇ニ包マレテ、マルデオ才父サンノ大キナ腕ニ抱キ締メラレテイルミタイデス。ソシテ、私ハ、私自身ノ為スペキ事ガ、ハッキリト判リマシタ。コノ作戦ハ完璧デス。一年後ノ本日未明、午前2時過ギ、十九名ノ「ヤクタタズ！」共ニ安楽死ヲプレゼントシマス。ソノ方法ハイタッテ簡便デス。尖ッタアイスピックヲ、上瞼ト眼球ノ間ニ挿入、ハンマーデ一撃ノモト頭蓋ノ奥ニ突キ刺ス。タダ、ソレダケデス。爪ヲ切ルヨリモ、簡単ニイトモタヤスクパチパチト仕留メル事ガ出来マス。タダ、コノ決意ヲ搖ルガヌモノニスル為背中一面ニ刺青ヲ入レサセテ頂キマシタ。私ニハ如何シテモ強イ覺悟ガ必要ダッタンデス。御許シ下サイ。来年ノ今日、再ビ雷鳴ガ轟キ、土砂降リノ雨ノ中、凄マジイ嵐ガコノ世界ヲ席捲スルコトデショウ。革命デス。コレハ革命デス。決意ハモウ搖ルギマセン。才父サン、私ハ、決シテ狂ッテナンカイマセン。永年全人類ノ心ノ底ニ巣食ッテイル真ノ思イヲ、私自身ガ、完璧ニ完全ニ実現サセル。タダ、ソレダケデス。才父サン、安心シテ下サイ。

From Sons Of the Patriots

合成音声、メッセージを読み終える。

円柱が、光り始める。

円柱の中心に、背を向けたAの影が、浮かび上がり、  
プレゼンターの背中を覆うように、巨大化する。

舞台が、闇に包まる。

暗転。

## 第一幕 第一場

### 「路傍にて」

再び、舞台中央に、  
真っ白な円柱。

舞台下手、円柱よりやや離れて古い木のベンチに、  
サングラスにマスクの女（盲の女）が、  
黒いブラウスとスカート、ショールを身に纏い、  
白杖を持って、静止画のように座っている。

その横、ベンチの上に、等身大のビクター犬のレプリカ。

舞台上手、円柱をはさんで相対するところに、大きな古いトランクケース。  
みすぼらしい男（聲の男）が、観客席 正面に向かい  
まどろむように 腰掛けている。

静止画の女、ぶちまけるように、唐突にしゃべり始める。

盲の女： ほんまに、わややわ！ほんまに、どないにもこないにも なりや  
しまへん。どうしようもないわ。どんなけ、待つたらええねん。  
ほんまに 堪らんなあ、アホちゃうか。

しばしの沈黙。

盲の女： そやけど、あのお方は、きっと、来てくれはる。  
それだけは、うちには、わかるんや。

ベンチの上のビクター犬に、にじりより頭をなでながら、  
犬に、語りかけるように…

盲の女： この子の名前は、ラッキーって言います。ほんまにかしこうて、  
ええ子だす。なんか、どっかで見たような気もしますけど、この  
子が、うちのラッキーだす。ほんもんだす。うちの目えの代わり  
です。この子が、おってくれてほんまに、助かってます。

## 間

盲の女： もういつやったか 忘れてもうたけど、ラッキーと散歩してたときのことです。少ししんどなって、ひと休みしたんや。ほんで、そろそろ行こかなと思うて立ち上がったらラッキーが、でんでん動けへんようになつてもうた。

**ためらいに踏ん切りをつけるように…。**

盲の女： ラッキーは、よう、わかってる！  
そやから、ここで、動けへんようになつてしまつたんや。  
こんなに、かとう、冷とうなりよつて、ほんまに死んでもうた  
みたいや。なあラッキー、うちも…、そろそろ、限界や。  
おまえみたいに、はよ、冷とうなりたいわ。

**聾の男が、何者かに、気づいたように、突然、立ち上がる。**

**すると、その気配に、盲の女は、声をあげる。**

盲の女： 誰や！そこにおるのは、誰やねん！

**聾の男は、盲の女の声を、無視するように、  
少し前屈みの姿勢になり、両耳を両手で塞ぎ、目を凝らすようにして、  
ゆっくりと前進しながら、観客席を見渡し始める。**

**それは、誰かを探しだそうとしているようだ。**

盲の女： 誰かそこにおるやろ、うちにはわかってるんや、目え見えへんと思つて、舐めとつたら、あかんで！ うちは、目え見えへんでも、ぜんぶ、お見通しなんや。

**聾の男は、左手から右手にゆっくりと視線を送り、  
観客ひとりひとりの顔を確認していく。**

盲の女： 何しとんねん。氣色悪いなあ。なんか返事せんか。氣色悪い。  
何しとるんや。いったいどこのどいつや。はよ、返事せえよ。

やがて、聾の男は、客席を見渡し終えると落胆の表情になり、  
両手を両耳からはずし、ぶらりと垂れて、  
肩を落とし、うなだれ、大きくひとつため息をつく。

ふと振り返り、ベンチに座る盲の女に気が付く。  
そして、ゆっくりと、両手をの方に差し出し、  
中腰で、そろり、そろりと近づく。

盲の女、その気配に怯えるように…  
怒声を上げる。

盲の女： なんや、どないしたんや！あかん、あかん。来たらあかん。  
ほんま、舐めとったら、いてまうで！

しかし、聾の男は、反応することなく、  
じわりじわりと、盲の女との距離をちぢめていく。

盲の女： あかん、あかん。それいじよう、近づいたらあかん。  
**くさつ！** 何やねん…！  
この臭いは、おっさんの臭いや！

盲の女、周囲を探る様子。

しかし、聾の男は、物怖じすることなく更に近づく。

両手で、盲の女の顔に触れようとする。

その瞬間、再び、怒声。

盲の女：**くさあ！** 何さらすんや！ほんまに、いてまうで！  
この杖でめんたま突き刺して、目え目えへんようにしたろか！

もうの女は、突如、立ち上がり、頭上高く、  
白杖を、ふりかぶる。

**聾の男は、盲の女の立ち上がる勢いに、押されるように、  
仰向けに、のけ反り倒れる。**

**盲の女は、頭上の 白杖をふるわせながら…**

盲の女： おっさん、誰やねん。名前、ゆうてみ…  
なあ、おっさん、うちみたいな、目え目えへんひとに なんも  
いわんと 近づいたら、えらい目に合うで、分ったか。  
分ったら、はよ、名前、ゆうてみ！

**聾の男、倒れた姿勢で、もうの女を見上げている。**

**しばしの沈黙。**

**聾の男、言葉にならない低いうめき声を上げる。**

盲の女： 何やねん！おっさん、どないしたんや！

**聾の男、低いうめき声を繰り返す。**

**盲の女、慎重に周囲をさぐる様子。**

盲の女： こけたんか？ だい…、大丈夫か？

**しばしの沈黙。**

**聾の男、盲の女を、静かに、見上げる。**

**盲の女、やがて、あきらめたように、  
大きくため息をひとつ…。**

**盲の女、とつとつとしゃべり始める。**

盲の女： さよか、そういうことかいな。おっさん、ようしゃべれんのか。

**盲の女、聾の男の返事を待つが、反応がない。**

**長い沈黙。**

**盲の女、諦めたように…**

盲の女： 成る程、そういうことかいな…。  
さよか、なにゆうても、あかんか。

**盲の女、再び、ベンチに座り、  
犬の頭を撫でながら、しゃべり始める。**

盲の女： なあ、ラッキー、このおっさん、ようしゃべれへんねんてえ…  
かわいそうやなあ。なんで、ようしゃべれへんねんやろ。  
なあ、ラッキー、おまえもこんなに冷とう、かとうなってしもた  
けど、おまえには、うちがおるから、まだましや。  
このおっさん、ひとりみたいや…、ほんま、かわいそうやなあ。

**聾の男は、盲の女の目の前で、正座して、  
盲の女の顔を見上げている。**

**やがて、意を決したように、  
聾の男は、両方の手のひらを上へ向けて、  
盲の女の方へ、すがるように、にじり寄る。**

恐る恐る、そっと、盲の女のひざに触れる。

**盲の女、少し、ピクッと反応するが、穏やかである。**

盲の女： なんや、びっくりするやん！どないしてん。

**盲の女は、聾の男の方を向き、  
膝にある聾の男の手を優しく握り返す。**

盲の女： おっさん、あんたの手え、やさしいなあ…  
ぬくいわ、ええてや… ほんまに、ぬくいわ…。  
ほっとする。もうちょっと、じっとしてよし。  
このまま、じっとやでえ～。

**盲の女、両手を重ねる。**

**しばしの間、まどろむふたり。**

**そして、聾の男、盲の女の両手をやさしく握り、  
そっと、自分の両耳に、もっていき、軽く触れさせる。**

盲の女： なんや、どないしてん？み、みみ、か？

**聾の男、両耳を触れさせたまま、首を振る。**

盲の女： なんや、おっさん、あんた、みみ、あかんのか？

**聾の男、うなずきながら、低いうめき声を二度繰り返す。  
そのうめきは、とても切なくあたりに、響く。**

盲の女： そうか、そりや、気の毒やなあ…

**そして、聾の男、両手を少し広げ、ゆっくりと、  
盲の女の頬に近づけ、両耳に、やさしく触れる。**

**盲の女、再び、ピクッと反応するが、より一層、穏やかである。**

盲の女： そうか、おっさん。大丈夫や。うちは、大丈夫や。

**聾の男、ゆっくりと、やさしくマスクを外す。  
聾の男、盲の女の顔を、凝視する。**

盲の女： おっさん、なんや？何すんねん！

**聾の男、盲の女の唇を見て、静かにうなずく。**

盲の女： そうか、マスクは、あかんのか。うちのかいらしい顔、  
見たいんか？うちは、見たことないけど。

**聾の女、少し恥ずかしそうに、はにかむ。**

## **聾の男、微笑みながら、静かにうなずく。**

盲の女： 何や、おっさん。おっさん、わろうとうみたいやな…。  
うちの話、判るんか？

### **間**

盲の女： なんか、じ～っと、こっち見てる。何や、視線、感じるわ。  
おっさん、そんなに、うちの顔ええか？

## **聾の男、にやけながら、明るいうめきを、二度する。**

盲の女： 何や、おっさん。うちの話わかるみたいやなあ～。おっさん、  
耳、聞こえんでも、うちのゆうてること判るんか？

## **聾の男、同意のうめき。**

盲の女： そうか…、そしたら、うちの話、聞いてくれるか？

## **聾の男、再び、同意のうめき。**

盲の女： うちなあ、もうだいぶ、長いこと、待ってんねん。  
ずっと待ってんねん。そやけど、でんでん、来てくれはれへん。  
もう、うち、しんどなってもうたわ。おっさんが、現れたとき、  
もしかしたら、あのお方と、ちゃうかと、ドキッとしたけど、  
ちゃう。残念やけど、ちゃう。うちには、分る。  
いまでも、あのお方の匂いは、鼻の奥に、残つとる。

### **間**

## **盲の女、聾の男に向かって、**

盲の女： おっさん、もう一回、手え、貸してくれへんか？

## **聾の男、聾の女に、右手を差し出す。**

**盲の女は、男の手を取り、優しく握る。**

盲の女： ほんまに、やさしい、ええ手えや。そや、おっさん！  
ちょっと、顔、触らせてえ～や。かめへんやろ？

**盲の女、聾の男の顔を触ろうとする。**

**聾の男、うながされるまま、聾の女に、顔を近づける。**

**その瞬間**

盲の女：**くさつ！** 堪らんわ、おっさん、あんた、ほんまに臭いで  
え、えげつない臭いや。この臭いはなあ。  
あの **「ヤクタタズ！」** どもの臭いや！

**盲の女、思わず立ち上ると同時に、  
聾の男を思いきり、突き放す。**

**再び、のけ反り、仰向けに、激しく、転倒する。**

**盲の女、下手上、天空に向かって、**

盲の女： おっさん、堪忍してや、ええか、おっさん、よう聞き！  
おっさんは、ええひとや、それは、うちには、ようわかってる。  
そやけど、やっぱり、あかんねん。おっさんの臭いは、えげつな  
いほど、あかんねん。ごめん。うち、目え、見えへんから…

**間**

**聾の男を見下すように、振り向き、**

盲の女： おっさん、あんた、いったい誰やねん？ どこのどいつや。  
名前、何ちゅうねん！、あんた、いったい誰やねん！

**聾の男は、その瞬間、スーッと立ち上がり、  
観客席を振り返り、うだなれる**

そして、おもむろに、上手を見る。  
元の位置、トランクケースの方へゆっくりと歩き出す。

盲の女： なんや、どないしてん。どこいくんや！

そして、元の位置。  
トランクケースを右手で持ち上げ、円柱のそばまで近づき、  
円柱を見上げ、上手に下がろうとする。

もう一度、  
名残惜しむように、振り返る。  
その瞬間、

盲の女、ポツリと…

盲の女： もう、うちをひとりにせんといて、もういっぱい、いっぱいや。

盲の女、両手で、肩を抱き、震えながら…

盲の女： おっさん、もしかしたら、あんた、名前…

突如、

上手奥より、するどい鞭の音がする。

間

続けて、2度、鞭の音がすると、上手より、背の低い男が、  
舞台中央まで、小走りで現れる。

上手奥より、「ストップ！」と大きな号令と共に、鞭の音。  
背の低い男が、観客席正面に向かい、立ちすくむ。  
背の低い男、黒い山高帽子をかぶっている。  
服は、着ていない、全裸のようである。  
しかし、股間あたりには、性器が無く、  
完全去勢されているようだ。

右手にやや小振りのトランク、  
左手には、丸いバスケットを持っている。  
腰には、縄が、縛りつけられており、  
ピーンと上手奥まで伸びている。

背の低い男： ボボボ、ボク の、ななな、名前は、ラララ、ラッキーって、ゆう  
ゆうんや。こここの、ななな、名前は、あああ、あのおおお、かた  
が、つつつ、つけて、くくくれ、ははったんや。ボボボクの、ゆゆ  
ゆ、めは、ろろろばに、なななって、みみん、んなのやや役に、た  
たたつ、ここことなんや。そそそやから、こここうして、ままま  
い、にち、いいい、しょうけけんめい、ははたらいって、おるねん。  
ボボボ、クのししそとは、みみみんなをししあわせのばばばし  
ょに、つつつれていく、ここ、ことなんや。ボボボ、ボク の、な  
な、名前は、ろろ、ろばのラッキー。

盲の女： 何やねん。なにが、おこってん。

再び、鞭の音がする。  
大きな声、「ゴアヘッド。ウォーク。」の号令。  
背の低い男、ゆっくりと下手舞台端まで、歩き始める。

それにつれて、上手奥より、  
縄に引っ張られて、車椅子の男が、登場。  
黒のシルクハット、チョビ髪、黒の夜会服で、きめている。  
首元は、赤い蝶ネクタイを、締めている。  
そして、手には、牛追い鞭を持っている。

再び、鞭の音、  
車椅子の男の「ストップ！ ウェイト！」の掛け声。

背の低い男と車椅子の男、  
二人のあいだは、ピーンと張られた縄で、つながれている。

車椅子の男、満面の笑みで、観客席に向かって、  
右手を上げ、手を振る。

車椅子の男：いや、みなはん、お待たせして、すんまへんなあ。面白い、失礼、失礼。ほんまに長いこと、お待たせしてしもうたわ、ごめんなちゃい。

**背の低い男、その言葉に合わせて、  
上手、正面、下手、正面とお辞儀を繰り返しながら、  
「ごご ごめんなちゃい！」を連呼する。**

背の低い男：ごご ごめんなちゃい！ ごご ごめんなちゃい！  
ごご ごめんなちゃい！ ごご ごめんなちゃい！

**三度目の鞭の音。**

車椅子の男：ストップ！・ステイ！・ビー クワイエット！

**背の低い男、正面に、直立不動の形で、凍り付く。**

**壇の男、いつのまにか、円柱に耳を当て、  
円柱に寄り添いながら、舞台の様子を見ている。**

車椅子の男：えらい、遅れてしまつたわ。まだ、おりはつたんでんなあ。  
そりや、良かったわ。間に合へんかと思いましたわ。

**車椅子の男、周囲の様子を見渡しながら、**

車椅子の男：あ～良かった！みなはん、よう待ってくれてましたなあ。来る途中、えらい、迷うてもうて、そやけど、間に合うたみたいでんなあ。そりや、よろし。よう、辛抱、しありました。それにしても、ちょっと、暗いみたいやね。みなはん、大丈夫つでつか？寝てはりまへんか？退屈してまへんか？ほんまに、大変やね。そやけど、わいがきたら、鬼に金棒っていうわけや、心配せんとど～んっと、まかしひきなはれ、わいは、あんさんがたのほんまの味方やから安心しなはれ、わいがおったら百人力、千人力、一万人力！いや、ちやう、一億人力や！ということで、ほな…

**車椅子の男、懐中時計で、時間を確かめる**

**背の低い男に、号令する。**

車椅子の男： バック！

**その号令に合わせ、車椅子の男、ロープを手繰り始める。**

**背の低い男は、小刻みに素早く、**

**車椅子の男の方に、正面を見たまま後退する。**

**車椅子の男の前まで来た時、再び号令。**

車椅子の男： ストップ！・ステイ！・バスケット！

**背の低い男、後ろ手に、バスケットを差し出す。**

**少し、手が届かない。**

車椅子の男： バック！・サイド！・ストップ！・ステイ！・バスケット！

**背の低い男、少し、下がり、車椅子の男の右横に立つ。**

**車椅子の男、バスケットの中から、**

**赤ワインの瓶とローストチキンを取り出し、**

**ローストチキンに、かぶりつき、赤ワインをあおりながら…**

車椅子の男： こりや堪らんわ！わいは、このカシワのもの炙ったんが、大好物だんねん。堪りまへん。それにこの真っ赤な葡萄の汁、ぴったりかんかんや！この瞬間が、ほんま、堪りまへん。  
これが、まあ、至福の ひとときちゅうもんやね！

**しばしの沈黙。**

**ゲップをひとつ、放つ。**

車椅子の男： よっしゃ、ええわ、落ち着いた、ホッとしたわ。

**車椅子の男、赤ワインの瓶とローストチキンを、  
バスケットの中に戻し、鞭を持ち、大きく鳴らす。**

車椅子の男： ゴアヘッド！ハリーアップ！

**背の低い男、元いた位置に、小走りで戻り始める。**

**縄が、再び、ピーンと張り、止まる。**

車椅子の男： ストップ！・ステイ！・ビー クワイエット！

**車椅子の男、背の低い男を確認して、  
盲の女の方へ目をやる。**

車椅子の男： ほな、始めまひようか。姉はん。えらいご無礼をいたしました。  
やかましゅうおましたなあ、えらいすんまへん！ほな始めます  
で、ま、わいの話、聞いとくなはれ。わいはなあ…

盲の女： ちょっと、待ち！おまはん、誰やねん。どこのどいつやねん。  
何、わけのわからんこというとんや。このしょんべんたれが、  
しまいにいてまうで、わかってんのか。

車椅子の男： いや、いや、姉はん、ちょっと、待っておくんなはれ、えらいいい  
ようでんなあ。こりや、キツイわ。姉はん、わいの話、耳貸して  
もらえまへんか。ちょっと、落ち着いてえなあ。ええか、わいは  
なあ、姉はん。姉はんのこと、よう知つとるんや、何でかいいうた  
ろか。わいはな、あのお方の 893 番目の弟子でんねん。

盲の女： 893 って、おまはん、何や！

車椅子の男： まあ、なんちゅうか、早い話が、わいは、あのお方の 893 番目の  
弟子でして、ほんで、わいはあのお方から、直々にあるお役目を仰  
せつかって、よしてもろたって、寸法だんがな。よろしいか。

盲の女： 何が、よろしいかやねん！ほんまに、鬱陶しいわ。

車椅子の男： まあ、姉はん、よう聞いとくなはれ、わいは、893 番目っていう  
ても、いちおう、直弟子でっせ！ まあ、いうてみたら、あの  
お方は、わいのお父はんみたいなもんでんねん。

**盲の女、動きを止め、車いすの男の声のする方に向かって、**

盲の女： えっ！お父はん？ 何や、それ？

車椅子の男： 姉はんが、ず～っと、ここで、待ってはるあのお方は、わいのお父はん、みたいなもんやってことだんがな。姉はん、よろしいかよう聞いておくんなはれ。

盲の女： 何やねん。

車椅子の男： ねえはん、来まへん。あのお方は、ここへはよう来まへんのや。

盲の女： ええ？何やて、何いうとんねん。誰が、けえへんねん。

車椅子の男： あのお方でんがな。あのお方は、もうここへは、よう来られへんようになってしもうたんだす。

盲の女： 何いうとんねん。誰がこうへんねん。

車椅子の男： 姉はん、氣い、静めて、よう、聞いておくれやす。あのお方は、もう、この世には、いやはりまへんのや。ほやから、ここへは、ようお越しにはなりはらへん。姉はんは、もう、あのお方と、会うことができまへんのや。

盲の女： おまはん、アホか。ゆうにことかいて、何ゆうとんねん。

車椅子の男： 姉はん、もう一回言います。よう聞いておくんなはれ。あのお方は、昨日の晩、みまかわれはりましたんや。

### しばしの沈黙。

**もうの女、立ち上がり、車椅子の男の方に向かって…  
声を震わせ、**

もうの女： えっ！何やて？何ゆうとんねん？

車椅子の男： 姉はん、そやから、でんなあ、あのお方は、お亡くなりになりはったということでんがな！

盲の女： おまはん、ええかげんにしよし、さつきから、黙って聞いとったら  
ゆうにことかいて、あのお方が亡くなりはっ？はあ！何や、何寝惚  
けたこと、ほざいてるんや！ええか、うちは、ここで、こうして、  
ずっと、待ってんねん。このうちが、待ってんねん。わかるか？

車椅子の男： 姉はん！

盲の女： このうちが、ずっと、ずっとやで。わかつとるんか！それ  
を、おまはん、何をぬかしてこますんや！ええかげんしいや、  
しまいにはほんまに、いてまうで！しょうもないこと、わめかんと  
さっさといに。この 「ヤクタタズ！」

**盲の女、崩れるように、  
犬の置物に倒れ掛かり、執拗に撫で廻し始める。**

盲の女： ラッキー、このおっさん、なにゆうとんやあ、アホちやうか。

**もうの女、犬の首に、顔を付け、すがりながら…**

盲の女： 嘘や、なあ、うちが、おまえと一緒に、こんなに、待ってるん  
や、そんなこと、ぜったい、あれへん。あのおっさんのゆうて  
ことは、嘘に決まってる。

車椅子の男： ねえはん、ほんまでっせ、わいのゆうことは、ほんまやけど、  
大丈夫だす。わしにまかせておくなはれ！わいにはあのお方から  
託された役目がおます。それは、姉はんみたいに待ち続けてはる  
かわいそうなみなはんを、あの

**「幸せの場所」** に連れて行くことだす。

## 間

車椅子の男： これは、あのお方の遺言みたいなもんでんねん。そやから  
姉はん、わいに、まかしておくなはれ！

**盲の女、車椅子の男の声が聞こえない。**

**犬のレプリカを膝に乗せ、撫でながら、  
呆けたように、ゆっくりと、唄いだす**

盲の女：

♪…「ロバのおじさん チンカラリン  
チンカラリンロン やってくる  
ジャムパン ロールパン  
できたて やきたていかがです  
チョコレートパンも アンパンも  
なんでもあります チンカラリン」

**車椅子の男、唄に合わせて、ゆっくりと  
縄を両手で、手繰りながら、背の低い男に、近か寄っていく。  
車椅子の男、背の低い男の後ろにつき、腰縄を握りしめる。**

車椅子の男： 姉はん、一緒に行きまひよ。それが、一番、ええことだす。

**盲の女、車椅子の男の声は、聞こえない。**

盲の女： ラッキー、なあ、ラッキー、なんかゆうてえや！  
頼むわ、ラッキー！

**犬のレプリカを抱き締め、泣きじゃくり、すがりつく。  
背の低い男、地団駄を踏む様に、悶える。**

背の低い男： ボボ、ボクの、なな、名前は、ろろ、ろばのララ、ラッキー。  
ボボボ、ボクの ししごとは、みみみんなをししあわせの  
ば、ば、ばしょに、つ、つ、つれていく、こ、こ、ことなんや。  
ボボボ、ボクの、なな、名前は、ろろろばのララ、ラッキー。

### **鞭の音。**

車椅子の男： ストップ！・ステイ！・ビー クワイエット！  
姉はん、ろばは、なんにも決められへんねん！  
ろばは、なんも、教えてくれへんのやでえ！

### **再び、鞭の音。**

車椅子の男： ターン！・スロー！・ライト！

**車椅子の男、背の低い男の腰縄につかり、  
ゆっくりと右に回り始める  
上手奥に、方向転換する。**

### **鞭の音。**

車椅子の男： ゴアヘッド！ハリーアップ！

**背の低い男、上手、聾の男のそばまで、懸命に小走りでいく。  
縄が、再び、ピーンと張り、止まる。**

車椅子の男： ストップ！・ステイ！・ビー クワイエット！

**背の低い男の背中が、聾の男の真横に見える。**

**その背中には、おびただしい、鞭の跡がある。**

車椅子の男： 姉はん、ろばは、おのれで、なんにも、よう決められへん！  
そやから、誰かが、やさしゅう 背中押したれへんかったらあかんねん。背中押したれへんかったら、よう動かんのや。

### **間**

車椅子の男： 姉はん、わいと一緒に、あのお方が、つくりはった  
**「幸せの場所」** へ、行きまひよ。

## **盲の女、ただ、ただ、犬のレプリカを執拗に撫で続ける。**

車椅子の男： 姉さん、あのな、わいの背中には、観音はんが居てはる。  
わいは、昔、ポン中やった。  
特攻帰りのおっさんに、教えてもらたんや。

## **車椅子の男、昔を懐かしむように、しゃべる。**

車椅子の男： 特攻行くときは、みんな打つらしい。やっぱおとろしんやなあ。  
覚悟、おのれ自身で、ようつけへんのや。そやから、クスリの力  
借りて、おのれ自身を奮い立たせるんや！

## **間**

車椅子の男： そやけど、ポン中になったら、地獄やで！  
何もかんも、判れへんようになる。いつも、誰かに見られとうみ  
たいやし、みんなで、わいを、はめようとしてくさる！誰のゆう  
ことも信用でけへんし、蔑んだ目つきが、体中につきささるんや  
ほんま、地獄や、堪らんなって、ほんでもまた、クスリや！  
正味の無間地獄に、落ちるんや。

## **車椅子の男、生唾を飲み込む。**

車椅子の男： その地獄から、わいを、あのお方は、拾うてくれはったんや。  
ほんで、わいの背中に、観音はん、背負わしてくれはった。  
そやから、わいは、あんさんみたいに、かわいそうで、気の毒な  
みなはんを、はよ、あのお方が、つくりはった  
**「幸せの場所」** に、連れていかなあかん。  
あそこやったら、きっと、あんたさんらを守ってくれはる。

## **しばしの沈黙**

車椅子の男： 姉はん、悪いこといえへんから。わいと一緒に行きまひよ。  
あの **「幸せの場所」** へ、行きまひよう。

**盲の女、車椅子の男の声が、聞こえない。**

車椅子の男： あかんか。 しゃないなあ。 よう、 覚悟つけられへんか？

間

**車椅子の男、行こうとして、背の低い男の背中を見る。**

**その横にいる聾の男と視線が合う。**

車椅子の男： ああ、おっさんも、おったんか？ そこでずーっと待つとったんか。  
なんぼ、待っても誰もけえへん。 おっさん、いっしょに行くか？

あの 「**幸せの場所**」 に…。

**聾の男、反応なく、車椅子の男の顔を凝視している。**

車椅子の男： そうか、おっさんも、あかんか。 みんな、ろばと一緒にやな。  
どうしようもない、誰か、背中押したらなあかん。

**しばしの沈黙**

**車椅子の男、聾の男を悲しげに見つめる。**

**聾の男、車椅子の男を、ただ、ただ、静かに見つめ返す。**

車椅子の男： おっさん、あんたの名前、何ちゅうねん？

**聾の男、車椅子の男に向かって、大きく首を横に振る。**

車椅子の男： なんや、どうしたんや、なまえ、わからんのかいな？

**聾の男、車椅子の男に向かって、大きくうなづく。**

車椅子の男： そうか、それは、どうしようもないわ。  
名前、わからんかったら、あかんわ。

**車椅子の男、鞭を大きく振る。**

**鞭の音が、響きわたる。**

**突然、背の低い男、思いついたように、震えながら、喋り始める。**

背の低い男： ボボ、ボク の、ななな、名前は、ろばのラララ、ラッキー。  
ボボ、ボク の、ななな、名前は、ろばのラララ、ラッキー。  
ボボ、ボク の、ななな、名前は、ろばのラララ、ラッキー。

**鞭の音。**

**背の低い男、黙る。**

**車椅子の男、てのひらを上に向け、空を見る。**

車椅子の男： なんや、雨か。夕立、来そうやなあ～

**聾の男、円柱を小刻みに叩き始める。**

**その叩く音は、抑揚をつけながら、徐々に、大きくなっていく。**

**車椅子の男、両手を広げ、再び空を見上げ、立ち上がる。**

車椅子の男： あかん。降って来た！これは、きっと、土砂降りになるで！

**聾の男、激しさを増しながら、円柱を叩け続け、  
ピークを迎え、最後に大きく両手で叩き終える。**

**その音をきっかけに、**

**盲の女は、犬のレプリカを抱いたまま立ち、**

**聾の男、マスクをして、右手にトランク。**

**背の低い男と共に無表情で、観客と対峙する姿勢を取る。**

**車椅子の男、立ち上がったまま、最後に、観客と対峙する**

**やがて、あたりは、暗くなり、円柱だけが、光り始める。**

**円柱の中に、Aの影が、浮かび上がる。**

**暗転。**

## 第一幕 第二場

### 「ゲーム」

舞台中央に、  
半円形の真っ白なテーブルが、  
直線面を観客席正面に向けて、設置されている。

円形面には、等間隔に、  
やや高いはしごのような背もたれのある  
真っ白な6つの木製の椅子がある。  
(マッキントッシュもどき)

各登場人物、上手より、番号順に着席している。  
登場人物の性別は、下記の通りである。  
登場人物1、3、4は、男性。登場人物2、5、6は、女性。  
6人とも、統一された白のシャツとズボンとシューズを着用。  
全員、丸刈りである。

その背後には真っ白な壁が、  
(縦切りにした半円柱の内側のようなもの)  
テーブルを囲むように、天井まで、そそり立っている。  
舞台上、明るくなる。  
すでに、すべてが、セットされている。

登場人物6、立ち上がり、  
観客席との間に、設置された  
目に見えないカメラに向かい、しゃべり始める。

登場人物6：さて、皆はん、お元気でつか。今晚も始まりました。  
「カミングアウト・ショー 実は、私…」のお時間だす。  
わて、こんばんの司会させてもらります。ヒミコ・ヤマモトだす。  
もちろん、偽名だす。よろしゅう、お願ひ申しときます。ほんなら  
早速始めまひようか。さっそくお馴染みの自己紹介から参りまひよ。  
ほな、わてから、いっちゃん遠い所にかいらしゅうおっちんして  
ぼんぼんから、お願ひしまひよ。どうぞ…。

**登場人物6、席に座ろうとする。**

登場人物1：ミーから、ですか。

**登場人物6、登場人物1に突っかかるように、立ち上がる。**

登場人物6：ミー、ミーでっか、いきなりやな。こりや、ほんまに、恐れ入谷の鬼子母神でっせ。ま、ええっか。さいだす、ぼんぼん、あんさんからや、ミーさんから、お願ひ申します。

**登場人物6、席に着く。**

**入れ替わり、登場人物1、立ち上がる。**

登場人物1：実は、ミー、

登場人物6：あかん、あかん。あんさん、いきなり、実はあきまへん。カミングアウトは、後のお楽しみ。しょっぱな、いきなり、そんなことされたら、わやでんがな。たまりまへん。最初は、やんわり行きまひよ。よろしいか。じんわりでっせ、じんわり、じんわり、やさしゅう、お願ひ申しとります。どうぞ…

登場人物1：ミーの名前は言えません。言ってしまうとパパやママに、お仕置きされるので、言えません。パパやママは、知らない人に名前を教えたらいけませんとおっしゃっていました。  
そして、ミーはそんなパパやママがとっても好きです。おわり。

登場人物6：ぼんぼん、ようできました。ぼんぼんは、おとうちゃんやおかあちゃんのこと、ごつつう、すきでんねんなあ。そら、よろしいわ。ほんで、ぼんぼん、といいくつだんねん？としは、ゆうてもろても、よろしんか？

登場人物1：はい、ミーは、26歳です。おわり。

登場人物6：へえー、さよか。26でっか、そりや、よろしいわ。

**登場人物6、登場人物1をいぶかしげに、にらみながら、**

登場人物 6 : もうちょっと、お聞きしたい所やけど、ここで、あんまり、深入りしてしもたら、ぼんぼんだけで、番組終わってしまうさかい、また、あとからカミングアウトの方よろしゅうお願ひ致します。よろしいか。

**登場人物 1、大きくうなずき、着席する。**

登場人物 6 : ほな、つぎのお姉ちゃん、よろしいか。

**登場人物 6、登場人物 2に視線を送り、右手で促す。**

**登場人物 2、すくと立ち、  
気をつけ、敬礼、直る。**

登場人物 2 : 自分は、特高帰りの死にぞこないであります。自分は、今夜、この場に、おきまして、自らの命をささげ、美しく散っていった多くの戦友たちの御靈を、皆様に、少しでも、お伝えすべく、参上いたしました。よろしく、お願ひいたします。

登場人物 6 : ええ！ お、お姉ちゃん、おなごはん、でっしゃろ。

登場人物 2 : 人は、姿形ではありません。中身です。自分の心は、立派な男子であります。しっかりと、見定めていただきたい。

登場人物 6 : うひょ！ 今晚は、この調子でっか。よっしゃ、まかしひきなはれこうなつたらわても覚悟決めまっせ！ ほんなら、次の大将、この調子でお願いいたします。

登場人物 3 : ほおう、予か。予の番で、いいのじやな。

登場人物 6 : ええで！ こんどは、予でっか。予さん、よろしゅうに…

登場人物 3 : 予は、やんごとなき家柄じや。予は、この家柄を、守り伝えていかなければならん。それが、予のさだめなのじや！

**突然、登場人物 2が、立ち上がり、拍手。**

**姿勢を正し、登場人物3に対し敬礼。**

登場人物2：自分は、尊き美しきさだめを守る為、粉骨碎身の覚悟で臨ませていただきます。

**登場人物3、登場人物2を見上げ…**

登場人物3：ほっ、ほう。良きに計らえ。大儀ない。

登場人物2：はっ、は～っ。座らせていただきます。

**登場人物2、座る。**

**登場人物3、座るのを確かめてから、登場人物1に向かって…**

登場人物3：ほん、お父様、お母様のこと好きか？

**登場人物1、大きくうなずく。**

登場人物3：それは、本当に、良い事じや。ほん、お父様、お母さまのおっしゃることを、素直に、お聞きになって、お家をしっかりと守ってください。それが、ほんの一番大切なことじやからのう。  
わかりましたか。

登場人物1：はい、わかりました、おじい様。おじい様のおっしゃるとおり、  
ミーは、お家を美しく立派に、守ってみせます。

**登場人物1と2、見つめ合い、笑う。**  
**おもむろに、登場人物1が、登場人物2の手を取り、**  
**執拗に、撫で回しながら、再び、見つめ合う。**

**登場人物5、スクっと、立ち上がり、**  
**笑いあうふたりに向って、**  
**怒りをぶつける。**

登場人物5：あんたたち、なにが、そんなに楽しいの？ホントに、気味悪くて  
しかたない。気分が、悪くなるだけ。わからない！

登場人物 1 : おばさん、誰ですか。ミーたち、何か悪いことしました？

登場人物 5 : おばさんって、誰のこと？あんたたち、このあたしのこと、ご存じない？

登場人物 3 : ほう、お主は、いったい、誰じゃ。名乗ってみなされ。さあ！

登場人物 5 : いいわよ、じいさん、でも、ビックリして、倒れたらだめよ。

まあ、倒れても、あたしが、いるから大丈夫か…。

いい、あたしの名は…

### **登場人物 1、2、3、同時に「あんたの名は…」**

登場人物 5 : 弱肉強食の医学界に、敢然と挑戦する、一匹狼、人呼んで、  
ドクターX、とは、あたしのことよ！

### **登場人物 1、2、3、同時に、拍手。**

登場人物 5 : あたし、失敗しないので。

### **登場人物 6、拍手しながら、思わず立ち上がる。**

登場人物 6 : ええ、おばちゃん、ドクターXやったんか。こりや、凄いわ。

登場人物 5 : ちょっと、待って！あんた、誰が、おばちゃんなの。

登場人物 6 : へへへえ、こりや、失礼こきました。負けといいて。

登場人物 5 : ちゃんと見なさい。でも、まあいいか。あんた、あたしのタイプだから、おおめに見てあげる。うふ、ふつ。

### **登場人物 5 が、登場人物 6 の頬をなせる。**

登場人物 6 : 先生、これだっか。

### **登場人物 6、右手小指を立てて、胸に当てる。**

登場人物 5 : いいの、いいの、タイプだから。

**登場人物 5 が、登場人物 6 をギュッと抱きしめる。**

登場人物 6 : 何しまんねん、先生。こうみえても、わて、女子高生でっせ。  
れっきとした、JKだっせ。あかん。援交になりまんがな。

**登場人物 4 以外、全員立ち上がり、  
登場人物 6 を見て、驚きの表情で、  
「え～っ！女子高生？！」  
いぶかしげに、いっせいに、叫ぶ。**

**しかし、登場人物 4 だけは、  
合掌した姿勢で、頭を垂れ、静かに座っている。**

登場人物 6 : あんさんら、そないにびっくりすることおまへんがな。ようみとく  
れなはれ、こないかいいらしセーラー服、ようにおとりまっしゃろ。  
ほれ！

**登場人物 6 、しなをつくって、一回転する。**

登場人物 6 : あんさんら、こないかいらしいセーラー服、わかりまへんか。  
わからんおひとには、わてが、月に変わって、お仕置きしまっせ！

**全員、登場人物 6 とその他の登場人物と  
顔を見合させて、けげんそうな様子で、着席する。**

**登場人物 6 は、そのまま、立ち残り、  
依然、登場人物 4 は、静かに座り、合掌のままの姿勢である。**

登場人物 5 : それにしてもそのしゃべり方はどう考えても JK ぽくないよね。  
あんた、本当に女子高生？

登場人物 6 : 先生、なにゆうとりまんねん。わては、れっきとした女子高生で、  
おま。よう、みとくなはれ。ほれ！

**登場人物5、登場人物6を見上げて、  
全身を確かめるように、見るが、  
もうひとつ納得のいかないようすで、小首をかしげる。**

登場人物5： でも、そのしゃべり方は、変よ。

登場人物6： ああ、さよか、先生、やっぱり変でありますか。ほんたら、まあ、カミングアウトしてこましますわ。実は、わて、この姉ちゃんのひいばあちゃんでんねん。この姉ちゃんの体の中に、わてもいれて、ぎょうさんのお人が、おりま。ほんで、そんとき、そんときに合わせて、いろんなおひとがでてきて、しゃべりはる。今晚は、たまたま、わて、でしてん。

**登場人物6、他の登場人物の顔を、  
舐めるように、確認する。  
そして、**

登場人物6： なんか、恐ろしかったんちやいまっか、今晚のカミングアウトちゅうもんが…

登場人物5： へえ～。そしたら、あんた、あれ？自分の中に、たくさんのひとが、いる…、多重人…。

登場人物6： そう、そうだす、先生、この姉ちゃんはあれだんがな。ほやからそこんとこよろしゅう面倒みておくれやす。頼んどきます。

登場人物5： わかったわ。ドキドキしちゃう。あんた、あたしのタイプだから、よろしゅう面倒みてあげるわ。

登場人物6： よっしゃ、これで話は、決まりましたな。ほんたら、いよいよ、本題に、入りまひよか。ええと、やね。

登場人物5： ちょっと、待って。

登場人物6： なんだす。先生、話は、さいぜん、終わりましたやろ。まだなんか、おますんか。

登場人物5：いいえ、もうあんたには、なにもないわ。

登場人物6：ほんだら、いったい何だすねん。ほんまに、難儀やなあ。

登場人物5：あんた、なにか、忘れていない。

登場人物6：忘れてる？　忘れてるって、何だす？

**登場人物5、となりにいる**

**登場人物4の肩に腕を廻し、軽くたたきながら、  
登場人物6を見上げて、**

登場人物5：このお兄さんのことよ、このひと、まだ一言も、喋ってない。

**登場人物6、登場人物4を見て、**

登場人物6：ああほんまでんなあ、お坊はん、こりや、誠に失礼こきました。  
わてとしたことが、おおポカするところやったわ。先生、おおきに、  
ほんなら、坊はん、よろしゅうお願ひ申します。

**登場人物4、周囲を見渡し。  
合掌のまま、静かに立ち上がり、  
一礼をして、ふたたび、席に付く。**

登場人物6：なんや、愛想おまへんなあ、なんか、ありまへんか。こうして、  
先生も、気いつこてもうてるのに、スカみたいでんな、先生。

登場人物5：まあまあ、このひとは、こういう人なんでしょう。でも、あんた、  
このひとのこと、お坊はんていったわよね。  
あんた、この人とお知り合い？

登場人物6：何ゆうてはりまやばし、わては、今晚、ここで、初めておうた  
初対面ですわ。な、坊はん、今晚が、初めてでっしゃる？

**登場人物4、合掌したまま、不動の姿勢。  
登場人物6、登場人物4の反応を見て、諦めるように、**

登場人物 6 : ほんまにこの坊はん、愛想も糞もないわ。ほんだら始めまっせ。

登場人物 5 : ちょっと、待って。

登場人物 6 : なんだす。先生、何回も、今度は、どうしはりましたんや。

登場人物 5 : あんた、なぜ初対面なのに、どうして、お坊さんとわかったの？

登場人物 6 : 先生、何ゆうとりまんねん。どなたはんでも見たら判りまっせ。  
こないに、立派な袈裟着てはるんや、一目瞭然でんがな先生、この  
きれいな紫のおべべ見えはれへんのでつか。やってられまへんわ。

登場人物 5 : う～ん、紫の袈裟か。成る程ねえ。

### **登場人物 5、登場人物 4 をじっくりと見る。**

登場人物 6 : 先生、こないきれいなおべべ、見えはれへんのでつか。ほんまに、  
どうしようもおまへんなあ。ほんだら、他の皆はんのおべべはどな  
いだす。

### **登場人物 4 以外の、登場人物、お互いを見比べる。**

登場人物 6 : ほんまに、あんさんら、どないにもこないにもなりまへんがなあ  
わてがゆうたりますわ。まずわてはこないかいらしセーラー服。  
先生は、ドクターXのシュツとした白衣。隣の坊はんは紫の袈裟  
その次の大将は立派な紋付羽織、大将その紋付高おましたやろ。

登場人物 3 : ほお～、おぬし、予のこの紋付が、わかるのか？

### **登場人物 3、立ち上がり、袖をピ～ンと張る仕草。**

登場人物 6 : そりや大将、わかりまんがな黒羽二重の染め抜きの五つ紋でっし  
やろ、そりや、上等でっせ。堪らんなあ。

登場人物 3 : ほお～、判るのか？たいしたもんじや。この紋付きは、予のひいじ  
いさまが、提灯行列のとき逃えさせたものなのじや。家紋は…

### **登場人物 6、遮るように…。**

登場人物 6： 家紋でっか、提灯行列でっか、そりやよろしい。ええもんだす。ご苦労さん。大将、もう、よろしいわ、座っておくれなはれ。

### **登場人物 3、心惜しげに、座る。**

登場人物 6： ほんで、おつきの自分はんや、自分はんは、こりやまた、ぴしっと、決めてはる。その軍服は、海軍はんでっか？

### **登場人物 2、再度、気をつけ、敬礼の形で、**

登場人物 2： 自分は、しんぶう隊で、あります。

登場人物 6： ほお～、神風でっか。こりやまた、ごくろうはんで、おます。大変でんなあ、あんじょうしとくなはれ。よろしいわ。

### **登場人物 2、敬礼直れ、着席。**

登場人物 6： ほんで最後は、ミーさんや。ミーさんは、黒のスーツに、真っ白なカッター、真っ赤なネクタイで、シュッと決めてま。

### **登場人物 1、登場人物 6を見上げ、微笑む。**

登場人物 6： まあ、こんな寸法とゆうことですわ。ひと通り自己紹介も済んだつということにしまして、いよいよ本題に入らしてもらいます。みなはん、よろしいか。

### **登場人物 4以外の、登場人物、大きくうなずく。**

### **登場人物 4、合掌したまま、不動の姿勢。**

登場人物 6： ほな行きまっせ。今晚は、特別にちょっとした趣向を用意させてもうります。その趣向というのは、このカードだす。このカードは、あるお方から託されたカードでして、初っ端にみなはん、それぞれ、一枚、カードを選んでもらいます。よろしいか？

登場人物 5 : そのあるお方って、誰？

登場人物 6 : 先生、誰ってボケとったら、あきませんで先生もよう知ってはる  
あのお方でんがな。みなはんもよう知ってはるあのお方です。

**登場人物 4・6 以外の、登場人物、一斉に息をのみ、  
そして、口々に「あのお方…」と小さくつぶやく。  
登場人物 4、合掌したまま、不動の姿勢。**

登場人物 6 : ほな始めましょ。よろしいか、これがあのお方から託されたカード  
だす。わてが、よう切らしてもらいます。

**登場人物 6、トランプをきるように、数回きり終え、  
黒の面を上に、テーブルの真ん中に置く。**

**カードは、通常のトランプよりひとまわり大きく、スマホ大。  
裏表がなく、片面は真っ黒、もう片面は真っ白である。  
登場人物 4・6 以外、テーブルに置かれたカードを凝視している。**

登場人物 6 : ほな、始めましょか、わてが、配らしてもらいます。

登場人物 3 : 瞬時、待たれ。

登場人物 6 : なんでんねん、大将。

登場人物 3 : 予にも、もう一度、切らせてもらえんかのう。

登場人物 6 : おお、よろしおま、どうぞ…

**登場人物 3、カードをテーブルに置いたまま、一度きる。**

登場人物 6 : 他のみなはんは、よろしいか？

**登場人物 4 以外の、登場人物、大きくうなづく。  
登場人物 6、テーブル正面に行き、再び、カードを持ち、  
観客席に向かい、カードの片面づつ、見せる。**

**登場人物 4、合掌したまま、不動の姿勢。**

登場人物 6： みなはんこのカードだす。こちらは真っ黒、こちらは真っ白。

**登場人物 6、観客席に。背を向け、  
各登場人物に、配り始める。**

登場人物 6： このカードは、全部で 36 枚おます。わてを入れてここには 6 人のみなはん。みなはんがたの目の前に、真っ黒な方を上にして、6 枚づつお配りいたします。

**登場人物 6、配り終え、改めて正面に向き直り、  
自らに配ったカードを、扇状に広げ、観客に見せながら、**

登場人物 6： こちらが黒、反対側は白でんなあ。みなはんがたは、お配りさせてもうた 6 枚のカードの黒い面をよう見てもうて、その中から、1 枚、これやと思うたカードを選んでおくれやす。

**登場人物 4 以外の、登場人物、一齊に、  
配られた 6 枚のカードを凝視する。  
登場人物 4、合掌したまま、不動の姿勢。**

登場人物 6： どないだ、えらばりはりましたか？ わては、これにしますわ。

**登場人物 6、選んだいちまいのカードを手に残し、  
残りの 5 枚をテーブルの上に戻す。**

**そして、先程、座っていた自分の椅子を  
テーブルの正面、中心に観客席に向けて、移動する。**

登場人物 6： ほんで、それぞれ選びはったカードを持って、この椅子に座ってもらいます。ほんで、ご自分のカードから巻き起こってくるみなはんがたのほんまの姿を感じてください。

**登場人物 5、すっと、即座に一枚選び、登場人物 4 の方を見る。**

**登場人物 4、合掌したまま、不動の姿勢。**

**登場人物 5、登場人物 4 に、ジェスチャーで、選ぶように促す。**

**登場人物 4、促され、気が付いたように、一枚選び、**

**右耳に当て、静かに眼を閉じる。**

**それは、まるで、カードの声を聴いているようだ。**

**登場人物 3、腕組みをしてカードを睨んでいる。**

**やがて、登場人物 2 のカードの一枚を指差す。**

**登場人物 2、決めかねていたのだが、**

**登場人物 3 の指示を得て、嬉しそうに一枚選ぶ。**

**登場人物 3、今度は、登場人物 1 を睨みつけ、**

**自分のカードを一枚選び、登場人物 1 に、差し出す。**

**登場人物 1、素直に、差し出されたカードを手にする。**

**登場人物 3 は、登場人物 1 に、カードを手渡し、**

**替わりに、登場人物 1 の前のカードを一枚手にとる。**

登場人物 6： みなはん、選び終わりましたか、ほんだら、感じてください。

どなたはんでもかましまへん。われこそはという方おりまへんか？  
おりはりまへんか？おりはれへんのでしたら、わてからいかしてもらいます。よろしいか？ほんだら、いきまっせ。

**登場人物 6、椅子に座り、**

**両手で、カードを持ち、目の高さに差し出し伸ばす。**

**登場人物 6、カードを睨みつけながら、額に、ゆっくりと近づける。**

**額に触れると、体全身が、震え始める。**

**身をくねらせ、絞り出すように、しゃべりだす。**

「実は、私…、おなかの中に、赤ちゃんが、います。」

「いつも、目の前は、真っ暗でした。

そして、誰かが来るのを、待っていたのです。」

「何の価値もない私。だから、いつも、体は、震えていました。

小刻みに、ずっと、震え続けるのです。

震えることだけが、私が、私の証だったような気がします。」

「そんな時、あのお方が、現れたのです。  
不思議に、体の震えが、止まりました。  
あのお方の匂いが、とても、懐かしく、  
そして、きつく、力強く、抱きしめられ、  
私の暗闇の奥に、ぼんやりとした光が、生まれました。」

「不思議にも、あたり一面に甘酸っぱい香りが拡がりました。  
とても暖かい感触が、私を包み込んでくれるのを、はっきりと感じました。」

「その時です。私の中に。新たな命が宿りました。」

**登場人物6、みずからのおなかに、両手をあてて、  
スクっと、顔を揚げ、観客席に向かって、  
安心した微笑み。**

**登場人物6、しゃべり終わると、スクっと立ち上がり、  
上手奥まで、歩み、立ち止まる。  
観客席正面を向き、両手で、お腹にカードを押しあて、  
うつむいたまま停止する。**

**登場人物6、立ち上がると同時に、登場人物4が、静かに立ち上がり、  
カードを耳に、聞こえない声にみちびかれように、中央の椅子に着席する。**

**登場人物4、カードを耳から離し、正面を見据え、  
手話で、語り始める。**

「実は、私… 名前がないのです。  
多くの見知らぬ人々が、パクパクと蠹いています。  
その中で、私は、ひたすら、貪る様に、探し続けたのです。  
私の為すべき事を…。」

「母の、手は、冷たく氷のようでした。  
いつも、誰かに、怯えているようでした。  
私は、そんな母を、扉の隙間から、  
ひっそりと、息を潜め、見つめ続けるだけでした。  
何も、できなかったのです。」

「台所に、ぶら下がる母の手は、本当に、冷たかった。  
私の両手で、温めようとしたが、  
ピクリとも、動きませんでした。」

「音が消えたのは、その日からです。  
パクパクと蠢く多くの見知らぬ人に引きずられ、  
見知らぬところに、連れていかれたのです。」

「みんなは、私を見つめるだけでした。  
そして、そこが、私のいる場所でした。」

語り終わると、登場人物4、静かに、立ち上がり。  
下手奥に、瞑想するように、歩み立ち止まる。  
登場人物6と正反対の位置。静かに、観客席正面を向き、  
右耳に、カードをあて、聞こえない声を聞いている。

登場人物4、立ち上ると同時に、  
登場人物2、直立の姿勢でナチス式敬礼。  
カードは、左手に持ち、胸にあてている。  
中央の椅子を目指し、機敏な動きで、着席すると、  
急に、怖気ついたように、背を丸め、  
両膝のズボンを握りしめながら、しゃべりだす。

「実は、私…あのう…、覚悟が持てなかつたんです。  
その～、天井も、壁も、それで、床も、あのう…、  
すべてが、真っ白な部屋の中で、  
えっ～と、密かに繰り返されていました。」

「その～、隔離された、部屋の中で、あのう…、  
私は、ある、決断を、えっ～と、  
いつも、迫られ続けました。」

「その決断は、あのう…、人の命に、深く関わっている、  
それで、それが、えっ～と、とても、重大な事で、  
それから、えっ～と、わたし、ひとりでは、抱え切れないほどの  
えっ～と、あのう…、とても、大切な事だったんです。」

登場人物2、背中を激しく震わせながら、嗚咽する。

やがて、両手で、顔を覆い、天を仰ぎ、  
そして、絞り出すように、絶叫。

やがて、  
正面に向き直り、両手を下ろし、  
肩で、大きく息をしながら、顔を、上げる。

沈黙。

微笑。

そして、

唐突に、自らの頬を、激しく、撲ち始める。  
力、果てるまで…、

そして、とつとつと、語り始める。

「その場所での、私の行いは、どのように選別するのかです。  
しかし、私は、一度も、決断をする事が、出来なかった。」

「私の背中には、今も、無数の鞭の跡が、血をにじませ、息衝いています。  
そして、それが、本当の私だったです。」

「しかし、幾度となく、繰り返されるうちに、次第に、痛みが、消え、  
やがて、満ち溢れてくる喜びに、体が、震えはじめました。」

登場人物2、語り終わると、静かに、立ち上がり。  
下手奥に、登場人物6の左隣に、立ちつくす。  
観客席正面を向き、右手で、左胸にカードをあてている。

登場人物2、立ち上ると同時に、登場人物5、さっと立ち上がり、  
手を振りながら、すたすと中央の椅子に向かう。  
両手をズボンのポケットに入れ、足を組み、着席する。  
ふてくされたように、しゃべりだす。

「実は、私… 偽善者なんだよね。  
だから、私の言う事は、殆ど、嘘。」

「私は、知っているの。あのまやかしの手術。  
特に、アイスピックを使うのは、最低ね。  
殆どの人は、廃人になったわ。  
でも、廃人になると、抵抗しなくなるから。らくちんなの。」

「あ～、それから、最後に、私の好物なんだけれど、  
もちろん、赤ワインと、ローストチキンよ。でも、これも嘘だけど。」

**登場人物5、**  
しゃべり終わり、ズボンのポケットから、カードを取り出し  
観客に、かざすように、白黒のカードの面を交互に見せながら…

「白と黒、表と裏、嘘と本当、  
結局、みんな一枚のカードなのよ…」

登場人物5、すっと立ち、上手奥、登場人物4の右隣で、  
左手を腰に、右手でカードを掲げ、ななめにポーズする。

おもむろに、登場人物3が、仁王立ち、  
そのまま、突然、テーブルに飛び乗り、  
「ワオーン、ワオーン、ワオーン」と  
観客席の三方向へ、向けて、遠吠えをする。

テーブルの上で、仁王立ちになり、カードを、咥えている。

椅子の前に、ひょいと飛び降り、  
おもむろに、着席、カードを手に取り、臭いを嗅ぐ、  
やがて、落ち着きを取り戻したように、  
両手を膝へ置き、背筋をピーンと張り、語り始める、

「その儀式は、屋敷の中庭に、首だけを出した犬を生き埋めにします。  
そして、その目の前に、鳥の丸焼きを供え、  
餓死する寸前に、その首を切り落とす。」

「私の場合、14歳の時に、夏の赤い満月の下、  
私の為に、父が、犬の首を撥ねてくれたのです。  
父のその美しい姿を、今でも、はっきりと覚えております。」

「しかし、私には、子供がいません。  
実は、私、不能者なのです。」

登場人物3、スクっと立ち上がり、一步前に出る。

しばしの時、  
やがて、うなだれて、  
とぼとぼと、上手、登場人物5の右隣に、たたずむ。  
カードは、白い方を内側にして、鼻のあたりに、押しあてている。

中央の椅子、空席。しばしの間。  
やがて、登場人物1、おもむろに立ち上がり、  
中央の椅子に静かに歩み、着席。  
カードを両手で持ち、白い面を観客に向け、  
カードにむかって、静かにしゃべりはじめる。

「実は、私… 14歳の春の初めに、あの方と出会いました。  
あの方は、白い壁から、私の前に現れたのです。  
とても静かな佇まいに、私を見据えられていました。  
そして、こうおっしゃいました。」

「あなたは、今、私の事が、どのように見えていますか？  
私は、ひとつのあやまちを犯しました。  
あなたは、その時の私なのです。」

登場人物1、すっと立ち上がり、両手でカードを持ち、  
白い方を、自らに向け、手を伸ばし、目の前に固定する。  
カードを見据えながら、しゃべり続ける。

「あの方は、言い終えると、振り返り、  
白い壁の中に、消え去りました。  
そして、そこに、真っ白な階段が現れたのです。」

**登場人物1、椅子を足掛かりにして、  
おもむろに、テーブルの上に登り、壁と対峙する。**

「この作戦は、完璧です。微塵の狂いもありません。  
深夜の闇の中、速やかに実行されます」。

「上瞼と眼球の間に差し込み、強く叩き、頭蓋の奥に突き刺す。」

「それは、真っ赤な血の味がしました。  
私は、犬のように、何度も何度も、舐め続けました。」

「私は、偽善者。だから、私の言う事は、殆ど、嘘。」

「止めどもなく湧き出してくるのです。  
私の口は真っ赤に染まり、思わずゴクリと飲み込んでしまったのです。」

「しかし、幾度となく、繰り返されるうちに、次第に、痛みが、消え、  
やがて、満ち溢れてくる喜びに、体が、震えはじめました。」

「その瞬間透明だった私が真っ赤に染められ鮮明になっていくのを感じました。」

「パクパクと蠢く多くの見知らぬ人々、  
あたり一面、のた打ち回り、呻き声だけが、響き渡る。」

「音のない暗闇、ただ、ただ、震えていました。  
たったひとりで、待ち続けたのです。」

「背中には、無数の鞭の跡が、息衝いています。」

「餓死する寸前に、その首を切り落とす。」

「その時です。私の中に。新たな命が宿りました。  
しかし、ピクリとも、動きませんでした。」

「みんなは、私を、黙って見つめるだけでした。  
そして、そこだけが、私の場所でした。」

**登場人物1、振り向き、観客席全体を、舐めるように、見渡す。  
そして、再び、カードの白い方を観客に差し出し、ゆっくりと裏返す。  
その顔は、凍り付くように笑っている。**

「先程、とても激しい夕立がありました。耳を劈くような雷鳴が轟き、バケツをひっくり返したような雨で、目の前が、真っ白になりました。雷の閃光だけが、私の網膜にヒリヒリと焼き付き、土砂降りの雨の中、私は、すべてに、背を向けて立ち尽くしていました。どれ程の時間が経ったのでしょうか。ふと、気が付くと、びっしょりと濡れた服だけが、皮膚に纏わりつき意地の悪い冷たさだけを感じていました。今は、優しい闇に包まれて、まるで、お父さんの大きな腕に抱き締められているみたいです。そして、私は、私自身の為すべき事が、はっきりと判りました。この作戦は完璧です。一年後の本日未明、午前2時過ぎ、十九名の「ヤクタタズ！」共に安楽死をプレゼントします。」

舞台は、次第に、暗くなり。  
半円形のかべだけが、明るさを増していく。  
やがて、逆光となり、登場人物1の影。  
両手を大きく、横に伸ばし、

「さあ、皆さん、ゲームの始まりです。そして、これは、革命です！  
これこそが、全人類の待ち望んでいた、真の革命なのです！」

**急激に暗転。**

## －休憩－

ただいまより、じゅうきゅうふんかんのきゅうけいをいただきます。

おきゃくさまにおかれましては、ごめんどうですが、  
いったん、げきじょうより、ごたいしゅつのうえ、  
ロビーにて、ごきゅうけい、おねがいいたします。

また、きゅうけいじかんをごりようのうえ、  
うけつけにて、おわたしいたしました  
ごしょうたいじょうを、おあらためくだされば、さいわいです。

さいにゅうじょうは、かいえんブザーにて、おしらせいたします。

ただいまより、じゅうきゅうふんかんのきゅうけいをいただきます。

おきゃくさまにおかれましては、ごめんどうですが、  
いったん、げきじょうより、ごたいしゅつのうえ、  
ロビーにて、ごきゅうけい、おねがいいたします。

また、きゅうけいじかんをごりようのうえ、  
うけつけにて、おわたしいたしました  
ごしょうたいじょうを、おあらためくだされば、さいわいです。

さいにゅうじょうは、かいえんブザーにて、おしらせいたします。

上記アナウンスが合成音声にて、2度劇場内に流れる。

尚、受付時に観客には、下記の内容物が封入された封筒が配布されている。

封筒は、洋長3黒封筒。次のような白インク印字あり。

メッセージ①・質問状②・マニュアル③

3点が封入されている。

この封筒は、第一幕終了後、開封してください。

それまでの開封は、ご遠慮下さい。

メッセージ ①

前略、才父サン、私ハ、今、身体ノ奥カラ満チ溢レテクル歎ビニ全身ヲ奮ワセテオリマス。コノ様ナ想イヲ才父サンニ伝エル事ガ出来ル事ニ、コノ上モナイ幸福ヲ感ジテオリマス。先程、トテモ激シタ立ガアリマシタ。耳ヲツンザク雷鳴ガ轟キ、バケツヲヒックリ返シタヨウナ雨デ目ノ前ガ真ッ白ニナリマシタ。私ハ、ソノ場所デ全テニ背ヲ向ケテ立チ尽クシティタノデス。ドレ程ノ時間ガ経ッタノデショウカ。フト氣ガ付クト、ビッショリト濡レタ服ガ皮膚ニ纏ワリ付キ、冷タサダケヲ感ジテイマシタ。焼ケ焦ゲタ臭イガ、鼻ノ奥ニ残リ、真ッ赤ナ血ノ味ガシマシタ。イツノ間ニ力私ハ、唇ヲ噛ミ締メテイタノデス。ソノ瞬間身体ノ奥ニアル熱イ塊ニ身ヲ委ネル私ヲ発見シタノデス。今ハ、優シイ闇ニ包マレテ、マルデオ才父サンノ大キナ腕ニ抱キ締メラレテイルミタイデス。ソシテ、私ハ、私自身ノ為スペキ事ガ、ハッキリト判リマシタ。コノ作戦ハ完璧デス。一年後ノ本日未明、午前2時過ギ、十九名ノ「ヤクタタズ！」共ニ安楽死ヲプレゼントシマス。ソノ方法ハイタッテ簡便デス。尖ッタアイスピックヲ、上瞼ト眼球ノ間ニ挿入、ハンマー一撃ノモト頭蓋ノ奥ニ突キ刺ス。タダ、ソレダケデス。爪ヲ切ルヨリモ、簡単ニイトモタヤスクパチパチト仕留メル事ガ出来マス。タダ、コノ決意ヲ搖ルガヌモノニスル為背中一面ニ刺青ヲ入レサセテ頂キマシタ。私ニハ如何シテモ強イ覺悟ガ必要ダッタンデス。御許シ下サイ。来年ノ今日、再ビ雷鳴ガ轟キ、土砂降リノ雨ノ中、凄マジイ嵐ガコノ世界ヲ席捲スルコトデショウ。革命デス。コレハ革命デス。決意ハモウ搖ルギマセン。才父サン、私ハ、決シテ狂ッテナンカイマセン。永年全人類ノ心ノ底ニ巣食ッテイル真ノ思イヲ、私自身ガ、完璧ニ完全ニ実現サセル。タダ、ソレダケデス。才父サン、安心シテ下サイ。

From Sons Of the Patriots

## 質問状②

(舞台上で使用されるフェイクカードの白い面に印刷されている)

### 質問状

あなたにとって、普通とは、何ですか？

あなたにとって、当たり前とは、何ですか？

あなたにとって、正しさとは、何ですか？

あなたにとって、美しさとは、何ですか？

そして、あなたにとって、幸福とは、何ですか



「ヤクタタズ！」

第一幕

ご観覧ありがとうございます。

この後、19分間の休憩を挟み、  
第二幕の開演予定でございます。

今しばらく、ロビーにて、おくつろぎください。

お客様には、開演ブザーにて、  
再入場をお知らせいたします。

また、休憩時間に、  
質問状の末尾にあるQRコードを  
お手持ちのスマートフォン等で、  
読み込み、アクセスの上、  
画面表示されるメッセージに従い、  
再入場いただければと存じます。

尚、この手続きはあくまでも、任意です。

それでは、第二幕より最後までのご観覧お楽しみ下さいませ。

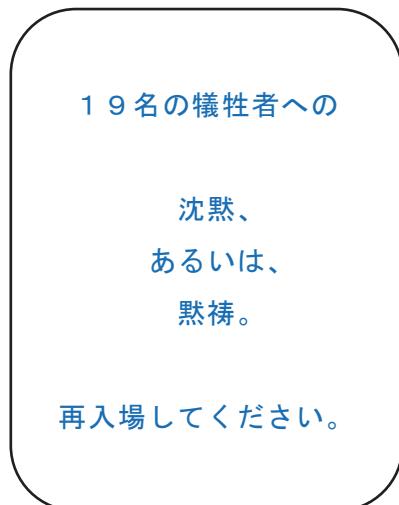
観客任意の QR コードアクセス画面。  
以下の通り。



NEXT をパネルタッチすると、  
画面が、切替わる。

舞台中央の赤いテーブルを俯瞰したライブ映像。  
その背後には、真っ白な半円柱の壁が、  
テーブルを囲むように、天井まで、そそり立っている。  
第一幕第二場と同様の 9 つの木製の椅子。  
9 人の人物が、既に着席している。

再入場ブザーと共に、  
下記のテロップが、映像に重なる。



映像終了。

## 第二幕 第一場

「アサイラム」

舞台上、徐々に明るくなる。

映像と同じ風景が、出現する。

第一幕第二場と同様の 9 つの木製の椅子。  
9 人の人物、テーブルに均等に着席している。

理事長

(白いスーツ姿。)

婦長・看護婦 A・B・C

(全員女性、婦長のナースキャップには、真っ赤な三本線が入っている。  
看護婦 3 人は、どこか、メイド風である。)

施設長・職員 A・B・C

(全員男性、施設長は、白衣。

職員 3 人は、白の長袖カッターシャツと真っ赤な蝶ネクタイ、  
どこか、ホスト風である。)

理事長、高い背もたれに隠れて、顔が見えない。

下記の席順。

〔観客側〕

理事長

施設長

婦長

看護婦 A

職員 A

職員 B

看護婦 B

看護婦 C

職員 C

**全員、スマートフォン（実は、フェイク・カード）と会話を始める。**

**誰もが、他の存在を無視するように、**

**フェイク・カードだけを凝視している。**

**それは、地下鉄に偶然乗り合わせた見知らぬ乗客のようだ。**

婦 長： 皆さんに、伝えなければならない、大切な事があります。

施設長： 本日、重要な行事を控えていますので、くれぐれも、よろしく！

看護婦A： つまり、あの事、ですか？

職 員C： いよ、いよ、始まりますか。

看護婦C： 責任重大だわ。

職 員A： 繁張します。

看護婦B： ついに、来たのね。

職 員B： 皆さん、覚悟を決めましょう。

看護婦C： ねえ、ねえ、ねえ、これは、噂なんだけれど…

看護婦B： なに、なに、何？

看護婦C： ここ、狙われているらしいの？

看護婦B： 何、どういう事？

看護婦C： つまり、誰かが、今晚、そっと、侵入してくるわけ。

職 員C： 目的は？

看護婦A： テロとか？バカみたい。

職 員B： いや、いや、わからないよ！最近、イロイロ、あるから…

看護婦B： 何、変な事、言わないで頂戴！それじゃなくても毎日忙しくて、堪らないのに！

職員A： いや、いや、ここの連中と真剣に、付き合ったら、ダメ！  
適當こそ、肝要！

職員B： しかし、ここは他の場所と比べたら、ホントいいところですよ。  
虐待とか、いじめとかまったくないし、それに…

看護婦C： それに…、何？

職員B： いいや、何も…

看護婦A： どうせ、噂なんですよ。根も、葉もない。

看護婦C： いや、あるメッセージが、届いたみたいですよ。

職員A： 誰に？

看護婦C： 誰にとって、皆さん、よく、知っているじゃないですか。

看護婦A： しかし、今夜は、何か、あるわね！何だか、胸騒ぎする。

婦長： それでは、皆さん、始めます。まず、施設長より…。

施設長： はい、了解しました。では、説明します。今夜、午前2時より、施設中庭にて大切な儀式が、執り行われます。とても重要なものですので、各自覚悟を持って対応して下さい。

職員A： 一体、どのような事が、行われるのですか。

看護婦C： 私たちに、危険が、及びませんか？

看護婦B： 私たちは、一体何をすれば？

婦長： はあ～い！皆さん、静かにして下さい。質問は、できません。

**看護婦・職員一同のどよめき、各々、不満を口にしながら、周囲を見渡す。**

施設長： 皆さん、落ち着いて下さい。動搖されでは、困ります。

婦 長： それでは、ここで、理事長より、お言葉を戴きます。  
理事長、どうぞ。

**理事長、立ち上がり、全員を見渡し、発言、着席。**

理事長： つまり、「アリとキリギリス」です。

**理事長、施設長、婦長を除く、  
全員が、慌てて、フェイク・カードで、スマホ検索する。**

婦 長： つまり、イソップ物語。

職 員 A： アリは、夏の間、懸命に、冬の食料を蓄えるために働きました。

看護婦 B： キリギリスは、バイオリンを弾き、楽しく歌って過ごしました。

職 員 C： やがて冬、キリギリスは、食べ物を見つける事が、できません。

看護婦 C： しかたなく、アリたちに、食べ物を分けてもらおうと頼みました。

職 員 B： しかし、アリは「夏に歌っていたのだから、冬は踊ったら？」と、

看護婦 A： 冷たく突き放し、キリギリスに、食べ物を分けてあげません。

施設長： 翌朝、キリギリスは、寒さに凍えて、飢死しました。

**理事長、拍手する。**

理事長： 皆さん、たいへんよくできました。 

婦 長： 皆さん、このおはなし、どのように思いますか？

施設長： 皆さんのご意見を伺います。意見のある方、挙手お願いします。

**理事長、施設長、婦長を除く、  
全員が、再び、懸命に、フェイク・カードで、スマホ検索する。  
必死の形相。検索動作、スピード増し続ける。**

**理事長、再び、立ち上がり、おもむろに、発言する。**

理事長： あのお方は、いつも、こうおしゃっていました

「わたしたちは、細心の注意を常に払わなければなりません。  
そして、この場所を守り続けるには、幾許かの犠牲が不可欠なのです。」

**理事長、着席。**

間

**唐突に、看護婦 A、挙手、立ち上がり、  
フェイク・カードを確認しながら発言する。  
職員 A、職員 B、看護婦 B、職員 C、看護婦 C、同様に、続く。**

看護婦 A： 「アリとキリギリス」 のほんとうの教訓は…。  
この話、もともとは「アリとセミ」だったみたいです。  
しかし、なぜ、キリギリスに、変わったのかしら？

職 員 A： そして、この話の前半は、大体、同じです。  
しかし、結末はいろいろあります。

職 員 B： 冬になって、穀物が雨に濡れたのでアリが乾かしていますと  
おなかの空いたセミが来て、食べ物をもらいたいと言いました。  
「あなたは、なぜ夏の間食べ物を集めておかなかったんです？」  
「暇がなかったんです。歌ばかり歌っていましたから」と、  
セミは、言いました。すると、アリは笑って言いました。  
「夏の間歌ったなら、冬の間踊りなさい。」

(河野与一訳『イソップのお話』岩波少年文庫) より

看護婦B：さあ、遠慮なく食べてください。元気になってことしの夏も、楽しい歌を聞かせてもらいたいね…、キリギリスはうれし涙をポロポロこぼしました。

(波多野勤子監修・『イソップ物語』 小学館) より

看護婦C：アリは笑って言いました。「夏の間は歌ったなら、冬の間は踊りなさい」すると、最後に、セミはこう答えました。  
「歌うべき歌は、歌い尽くしてしまいました。私の死骸を食べて、生きて残って、下さい。」

(出典不明)

職員C：ディズニー版もありますよ。「もうひとつのアリとキリギリス」。キリギリスがアリに助けを求める。ここでアリはキリギリスを受け入れ、食糧を分けてあげる。すると、それに感動したキリギリスはともかくにも感謝する。そして何か自分にも恩返しできることはないかと思い、バイオリンを奏でることで、アリたちを楽しませる。そして、アリもキリギリスも、冬を乗り越えることができました。

施設長：教訓は、二つ。

**施設長、興奮気味に、フェイク・カードを確認する。  
声を荒げ、力説。**

施設長：ひとつめは、将来の危機に備え、常に考え、行動しましょう。心構えが、大切です。覚悟を持って、取り組みましょう。そうしなければ、キリギリスのように、ひどい目にあって、死ぬ。

**フェイク・カードを再度確認。  
施設長、一段、テンション上がる。**

施設長：ふたつめは、アリは、餓死寸前の困っているキリギリスを目の前にして、決して助けの手を差し伸べない。冷酷で独善的である。しかし、食べなければなりません。仕方ない事です。

**フェイク・カードを凝視する。  
そして、施設長、更に、興奮、声を裏返し、尚。**

施設長： つまり、自分のケツは、自分で、拭け。他人を頼るな、擦り寄るな！誰も、助けることは、できないんだ！そんな、余裕は、誰にもない！アリさんは、一生懸命、汗を流して働いた。なぜだ？それは、自分の為、家族の為、種族を守り通す為だ。それが、悪いか？当たり前の事でしょう？普通でしょ！誰しも、わが身が、大事、嫁や子供が、大事に決まってる！見知らぬ他人の、まして、遊び人のキリギリスの為じゃない！

**施設長、肩で、息をしながら、倒れこむように、着席する。**

婦 長： 施設長、大丈夫ですか？あまり、興奮なさっては…、それに、おしゃべりが、過ぎます。ただのたとえ話なんですから…

施設長： いや、申し訳ない。しかし、婦長、たとえ話と言って、簡単に済ましちゃ、駄目です。要は、教育が、肝心なのですから。

婦 長： まあ、そうですけれど、今夜の儀式のご説明をお願いします。

職 員C： しかし「アリとキリギリス」の話は気になる。

看護婦C： そうそう、どうして、「アリとキリギリス」？

**看護婦B、改めて、フェイク・カードでスマホ検索。**

看護婦B： イソップは、ギリシャの奴隸だったみたい。アリストテレス曰く、ポリス市民が完全な人間であり、奴隸は支配されるように生まれついた不完全な人間である。したがって、市民が奴隸を所有することは当然のこと。つまり、アリストテレスは、人間には、完全な人間と不完全な人間がいて、完全な人間は、不完全な人間を支配できる。それは、至極当然のことであり、普通で、当たり前の事だと、断言しているわけなのよ。いわゆる、優生思想ありきね。そして、ある人は、イソップ寓話は、奴隸の処世術、つまり、より良き奴隸になる為ための道徳であるって、常に、不完全な人間どもは、みんな、いい子ちゃんでいましょうね！みたいなあ…

職 員 B : アリは瀕死状態のバッタなどの昆虫を巣に連れ込み、水等を与え延命させつつ少しづつ体液を吸いつくしてから体を食べるらしいよ。

看護婦 A : オウシユビツツね。

職 員 A : えっ！オウシユビツツって、そんなところだったけ？

看護婦 C : オウシユビツツは、ホロコーストの終着駅。

職 員 C : ホロコーストは、もともと、ユダヤ教の宗教用語らしいよ。  
「燔祭」って言って獣を丸焼きにして神前に供える犠牲を意味する  
ギリシア語なんだって。

職 員 B : けど、ナチスのホロコーストは、大量虐殺ですよね！

看護婦 B : 結局、アリは、キリギリスを巣に連れ込み食べちゃうわけね。

看護婦 A : 残酷ねえ。でも仕方ないか、アリも生きていかなくちゃならない。  
生きることはシビアねえ。そして、最後は、食べる事なのよね。

職 員 A : 犺牲だね、結局、誰か、犺牲にならなくちゃならないんだ！

看護婦 C : 問題は、誰が、犺牲になるのか、選ぶことね。

職 員 C : 選ぶなんて、つらいし、難しいよ。無理！無理！

看護婦 B : しかし、誰かが、犺牲にならなくちゃ、仕方ないのよ。

職 員 B : 「アリとキリギリス」 選別試験。生贋裁判？

看護婦 A : 普通、キリギリスでしょう。当たり前ですよ。

職 員 A : 働かざる者、食うべからず。

看護婦 C : キリギリスさんの死骸は、アリさんの大好物だしね。

職 員 C : でも、それが、目的で、あえて、食べ物を分けなかつたら。

職 員 B : 計画殺人？まあ、殺人じやないか。直接、手を出してないものね。

看護婦 B : いわゆる、ネグレクトね。

職 員 C : 質の悪い虐待行為、未必の故意かな？少し、違うか？

看護婦 C : いえ、いえ、決して、アリは、悪くないですよ。だって、自分の稼いだものを使つただけですもの。キリギリスに分け与える義理も、義務もないじやないですか！普通で、当たり前の事でしょう。

職 員 A : でも…

看護婦 C : でも、何です。

職 員 A : いや、何でもない。

看護婦 C : 何でもないわけないじやないですか！言いたい事は、はっきりおしゃってくださいよ。奥歯にものの挟まった言い方なんて失礼です。

職 員 A : いや、そんなわけじやなくて、ただ…

看護婦 C : ただ、何です？

職 員 A : すこし、薄情かなと思って、同病相憐れむっていうか。困った時は、お互い様っていうか、助け合いの精神が…

看護婦 A : けど、アリとキリギリスは、同じ仲間なの？結局、アリは、キリギリス、食べちゃうんですよね。普通、仲間、食べないでしょ。

職 員 B : 共食い？あ～、あ、カマキリね。カマキリの雄は、交尾が終わると、本当に、雄をいただくのは、有名ですよね。一度、食べられたい！

看護婦 B : 変態は、さて置き。キリギリスは、バイオリン弾くのが仕事でしょ！夏の間、ずっと働くアリさんを尻目に、弾いていたよね。

職 員 C : 仕事って、誰に聞かせるの？アリさんへの応援ソング？

看護婦 C : 決まってるじゃない。雌のキリギリスよ！

看護婦 A : 雌を誘って、卵、産ませるのよ。種族維持の本能よ。

職 員 A : アリは、生命維持が第一目的、キリギリスは、種族維持が第一目的か、どちらも大変だね！

職 員 B : キリギリスは、狭い場所、何か飼育箱みたいなところ、一か所に、閉じ込めてしまうと本当の共食を始めるみたいですよ。

看護婦 B : そうそう、だから、キリギリスを飼うのは、結構、大変みたいね。何か、限界みたいなものあるみたいで、一定の個体数を超えると、自然淘汰が、始まるのよ。結局、誰か、犠牲者になるわけね。

職 員 C : 犠牲者って、誰なんです。

看護婦 C : 決まってるじゃない。弱いキリギリスよ！

看護婦 A : その檻みたいな飼育箱の中の一番弱い者から、仲間に寄って集って、食べられるわけよ。

職 員 A : 共食いか。悲劇やねえ。でも、何とか、ならないものですか？

職 員 B : 限界を見極める事、キリギリスだけに、ギリギリス！なんちゃて！

看護婦 B : そう、ギリギリになる前に、誰かに、十字架、背負ってもらう。

職 員 C : 十字架って、なんか、キリストみたいだね。

看護婦 C : まあ、そういう事ね。限界になる前に、自ら勧んで手を上げる。

職 員 A : でも…

看護婦 C : でも、何です。

職 員 A : いや、何でもない。

看護婦 C : 何でもないわけないじゃないですか！言いたい事は、はっきり、おしゃってください。さっきから、何度も、何度も…

職 員 A : 皆さん、ご存じじゃないですか。もうここは、限界っだって事を…

看護婦 A : 限界なのね。そう、ここは、やっぱり限界なのね。

職 員 B : ギリギリス。

看護婦 B : 何か、起ころるわね、きっと！だって、ぎりぎりなんですもの！

職 員 C : 誰ですかね？

看護婦 C : 誰って、何なの？

職 員 A : 誰が、いったい…

**職員 A、職員 B、看護婦 B、職員 C、看護婦 C、**  
**一斉に、初めて相手の顔を確認し、**  
**再び、スマホ画面に目を移し、**  
**口々に、聞こえない声でつぶやき始める。**

**突然、施設長、立ち上がり、しゃべりだす。**

施設長 : 今夜執り行う儀式は、とても、重要なものです。この儀式によって、この場所は、再生し、あのお方が、まさに復活するのです。

**看護婦・職員一同のどよめき、再び、各々の顔を見交わす。**  
**婦長、おもむろに立ち上がり、どよめきを制して、**

婦 長 : それでは、皆さん、よろしいですか？全員、不断の覚悟を持って、事に当たって下さい。よろしくお願ひします。それに先立ちまして、今晚、晚餐会が開催されます。会場は、一番奥の白い部屋です。それでは、最後に、理事長のお言葉をいただきます。

**理事長、促され立ち上がる。  
両手を大きく開き、預言者のごとく、宣言する。**

理事長： 皆さん、ありがとう！刻は満ちました。いよいよ、最後の審判です。

## **「アリとキリギリス」**

あのお方は、こうおしゃいました。

「わたしたちは、すべての人々を救済しなければなりません。  
そして、その為には、幾許かの犠牲が不可欠なのです。」

**理事長を除く、全員、一斉にスマホに向かい、  
つぶやき始める。**

そのつぶやきの中、

**急速に、暗転。**

## 第二幕 第二場

### 「最後の晩餐」

舞台中央の真っ赤なテーブル。  
その背後には、真っ白な半円形の壁が、  
テーブルを囲むように、天井まで、そそり立っている。

先程の理事長の座っていた椅子はなく、  
その他椅子は、すべて空席である。

誰もいない空間である。

突如、空間を切り裂く鋭い鞭の音が響きわたる。

下手より車椅子の男が、登場する。  
電動車椅子を操作し舞台中央へ、  
テーブルを背にして、観客と対峙する。

車椅子の男： えらい長い事、お待たせしてしもうて、えらいすいません。  
もう何年前やったか、忘れてもうたけど、どえらい出来事が、  
おましたやろ？みなはん、覚えてはりまつか？あん時は、テレビ  
や新聞、週刊誌、ゆわゆるマスコミの皆はんも、必死こいて、  
バンバン報道しておましたなあ、ネットもえらい騒ぎで、大変で  
した。そやけど、今は、でんでんでんなあ、そんなもんだす。  
世間というもんは、普通で、当たり前の生活しとるお方にとって  
は、所詮、他人事やし、そんな事より、自分の生活が、一番でつ  
からなあ～、しうがおまへん。仕方ない事だす。  
まあ、そんな話はさておき、わいらのお芝居どうでした？ややこ  
しおまっしゃろ。わいらもようわかりまへん。ほんまに。ほんで、  
ここだけの話だすけど、これ、書いとる先生も、ほんまは、よう  
わかれへんみたいですね。(笑)さてと、ほんだら始めまひよか。  
出演者の皆はん、準備、出来てまつか？そろそろ、始めまっせ。

車椅子の男、鞭を振る。  
鞭の音を合図に、全員、周囲より登場する。

各組、各人物を伴い、談笑しながら…  
三々五々、赤い円卓に、着席、  
背後の背もたれには、各担当者が、控える。

下記の席順。

(上手より登場)

[観客側]

(下手より登場)

空席

施設長＝聾の男

婦長＝盲の女

看護婦 A＝登場人物 4

職員 A＝登場人物 6

職員 B＝登場人物 5

看護婦 B＝背の低い男

看護婦 C＝登場人物 3

職員 C＝登場人物 2

上手より登場

施設長 = 聾の男（マスクをして、右手にトランク）  
看護婦 A = 登場人物 4（紫の袈裟）  
職員 B = 登場人物 5（白衣姿）  
看護婦 C = 登場人物 3（黒の羽織袴姿）

下手より登場

婦長 = 盲の女をガイドヘルプしながら。  
職員 A = 登場人物 6（セーラー服姿）  
看護婦 B = 背の低い男（青色のろばの着ぐるみ）  
職員 C = 登場人物 2（軍服姿）

登場人物 1 と理事長は、不在。

車椅子の男、電動車椅子で、テーブルに向かい方向転換。  
先程、理事長がいた席に着く。

車椅子の男：いや、皆はん。お疲れはんどす。いや、今も、お客様はんに、説明しとったんですけど、このお芝居、ややこしすぎてようわかれへん！ほやから、今晚の出演者の皆はんに、寄ってもうて、もういっぺん、ややこしいとこ、見直しましょかという事になりました。よろしいか？皆はん、どうだす。

職員B：えっ！大丈夫ですか？こんな展開、台本には、ありませんけど？

看護婦B：大丈夫、大丈夫、アドリブでいいんですよね？

車椅子の男：アドリブでっか、難しあますけど、一発、覚悟、決めましょか！

職員C：は～い。893番目さ～ん。

車椅子の男：はい、どうぞ、あんはん、あんはんから、お願ひ申します！

職員C：さっき、お客様はんって、おしゃってましたけど、誰の事です？

車椅子の男：あんはん、何ゆうりますんや。ここにおられる普通で、当たり前の善良な市民の方々やおまへんか！あんはん、めえまへんか。

**車椅子の男、後ろを振り返り、右手を開き、  
その手を振りながら、観客席に愛想する。**

看護婦C：それは、つまり、ここにおられる善良な市民の方々と合意形成を図るわけね。

登場人物3：お姉さん、あんた、なかなか、難しい言葉、知っとるんじやのう。

看護婦A：現状認識の共有化ですね。

登場人物3：ほう～、あんたも負けぬのう。

看護婦B：おじいちゃん、こう見えて、ナースメイドのベテランよ。

背の低い男：やっぱ、それって、コスプレですか？ボクも趣味ですけど。

車椅子の男： これこれ、ろばくん、あんはん、コスプレマニアやったんか！

登場人物 2： 自分は、好きだなあ～コスプレ！男装の麗人なんて、最高！

聾の男： 893番目さん、これって、本当に、アドリブですか。どう見ても、この流れ、なんか小劇場っぽい台本あるみたいでけど？

車椅子の男： アホ、ほんまもんのアドリブなんて、なかなかできへんのよ。

施設長： そうです。アドリブは危険です。どこへ行くのか、わかりません。

婦 長： その通りです。特に観客巻き込んだアドリブ、いわゆる客いじりは、至難の業です。お客様は、大人しく訳知り顔が、一番です。

登場人物 6： そういえば、さいぜん、危なおましたなあ、あと、もうちょっとで、客いじりに行くとこやった。おっとろしいとこやった。知らん顔したお人は、ほんまにおっとろしおまっせ。なにゆいだすかわかれへんし、なにをしでかすかもわかれへん。ほんで、名前のないお人のつぶやきが、そこいらじゅうに、蠢いておる。弱いもん見つけたら、アリが、群がる様に襲い掛かる。容赦は、おまへん。骨の髓まで、しゃぶられるんですわ。ほんまに、おっとろしい世の中だす。まあ、ええわ！ わてには、関係ない事だす。それにしてもこの台本、書いてる先生、何が、ゆいたいんでしゃろ？ ようわかりまへんなあ。

登場人物 5： 前衛みたいよ。

登場人物 6： 何だす。その前衛って…

登場人物 5： つまり、アバンギャルドよ。不条理よ。

登場人物 6： 先生、何だす。不条理って、あの神はん、待ってるやつでっか？

登場人物 5： いえ、違うみたい。前衛演劇の極北、吉本新喜劇を目指しているみたいよ。まじ、馬鹿ね！

登場人物 6： ほんまでんな。ほんまもんのアホでんな！

#### **登場人物4、すっと立ち上がり、合掌、読経。**

登場人物4：めつどかくんもたらぼりわ　めつどかくんもたらぼりわ  
めつどかくんもたらぼりわ　めつどかくんもたらぼりわ  
めつどかくんもたらぼりわ　めつどかくんもたらぼりわ

登場人物6：こりやまた、なんでんねん！だ、大丈夫でっか、坊はん。

登場人物4：真言です。マントラです。いわゆる、呪文です。

登場人物6：前衛の次は、カルトでっか？けったいな人ばっかりやな。  
こりや、完全に、ヨシモト、超えてますわ。よろし。

車椅子の男：姉ちゃん、ご苦労はん。ほんだら、そろそろ、続き行きまひよか？

登場人物5：続きって893番目、善良な市民、目の前のお客さんとの合意形成  
どうすんのよ！

車椅子の男：まあまあ、先生、あんはん、さいぜん、わいのドッペルゲンガーや  
ったお人でんなあ。何か、わいの背中の観音はんに、どこか、よう  
似てる気がしますわ。他人とは思われまへん。そやからわいの気持  
ちわかりまんな。つまり、これ、書いてるお人、ほんまもんのアホ  
でっせ。何か考えあるわけおまへんがな。ほんまのとこ何の考えも  
のうって思いついたまま書き散らかしてるわけでんがな。何も深い  
意味なんか、でったいありしまへん。なあ、施設長。

施設長：いや、しかし、先程のお話では、問題の共有化っていうか…

車椅子の男：あんはんも、もしかしたら、アホか？アホの書いた台本に、わいら、  
きげんようつきおうておりますねん。それでよろしやん。  
目の前のお客さんも、こうして、ここまで辛抱してつきおうてくれ  
とるわけでんがな、難しい話は、皆はんひとりひとり、家帰って、  
ゆっくり考えてもらいまひよ。なあ、それが、いっちゃんや！

施設長：いや、ちょっと、待って下さい。そんな無責任な…  
それに、まだ、理事長にも、ご相談を…

車椅子の男： アホか！あんなエセ理事長、ほつといたらええねん！  
わいは、893番目の直弟子なんやさかい、かめへん。かめへん。  
ほつといたらええねん。それに、この問題は、ほんま、デリケート  
な事やねん。少々の事で、解決するわけあれへん。

婦 長： しかし、それでは、立場が…

車椅子の男： おばはん！何、ねぶたい事わめいてるんや。立場？誰の立場や！  
わいらは世間からつま弾きされたもんばかりなんや。ほやから  
普通のとか、当たり前のとか、そんな立場とかが、鬱陶しいんや。

婦 長： でも…、しかし…。

車椅子の男： デモも、ストも、テロもないねん。理屈は、いらんねん。  
わいは、893番目の直弟子なんや。これが、証拠や！

**車椅子の男、右手を掲げる。鞭を持つ手首には、  
識別用リストバンドが、装着されている。**

登場人物6： なあ、893番目はん。何か、また、知らんうちに、お芝居に戻っ  
てつませ、やっぱり、ほんまややこしい台本でんなあ、わて、何か、  
頭、痛とうなってきましたわ。

車椅子の男： ほんまでんなあ、姉ちゃん。ほんまにややこしい台本でんなあ。  
そやけど、このままのほうがええ。わいらには何の責任もないし、  
誰からも責められへん。それが、わいらのほんまのルールなんや。

登場人物6： それは、わても、うすうす、気いついてましたけど…

車椅子の男： ほんだら、それでええ。あのお方は、ちゃんと見てくれてはる。

**登場人物1・2・3・4・5・6  
一斉に立ち上がり、声を合わせて**

**「あのお方って…、誰？！」**

**施設長・職員 A・B・C 婦長・看護婦 A・B・C**  
一斉に、フェイクカードに向けて、声潜めて  
「ヒソ・ヒソ・ヒソ・ヒソ ヒソ・ヒソ・ヒソ・ヒソ」  
とつぶやき始める。

登場人物 3 : おい、誰か足りんのう？

**登場人物 2、敬礼姿で、辺りを見渡し、偵察のそぶり。**

登場人物 2 : 少年、一名、見当たりません。

登場人物 3 : おお、そうじゃ！ほんの姿が見えぬのう！

登場人物 5 : さっきまで、一緒だったよね。おかしいね？

登場人物 4 : めつどかくんもたらぼりわ 合掌！

登場人物 6 : 大将、そりゃ、気になりますわなあ！あんさんの息子はんやから！

登場人物 3 : お主、何を言つとんじや！

登場人物 6 : 大将、やめまひよ！ほんまに！あのほんは、ほんまは、あんさんの隠し子でしゃろ！わての目は、誤魔化せまへんで、よろしいか？

**登場人物 6、テーブルの全員に睨みつけ、**

登場人物 6 : 皆はん、もう終わりだす。ほんま、お芝居は、もういりまへん！

**登場人物 6、盲の女に視線を移す。**

登場人物 6 : 姉はんも、もう嘘はええねん。おまはん、ほんまは、目えめえる。ほんで、誰も待ってんへんし、誰もけえへんのもよう知ってはる。そやから、わての目は、誤魔化せまへんってゆうてましゃろ！

**盲の女、立ち上がり、体全身が、ガタガタと震え始める。  
身をくねらせ、頭を抱え込み、上下に激しく揺さぶる。**

## **登場人物 6、聾の男に視線を移す。**

登場人物 6： おっさんは、ほんまは、しゃべれるんでしゃろ！  
なんもかんも、ぜんぶ、よう聞こえとるんでしゃろ！  
もうよろしいねん！ここでは、もう、お芝居は、いりまへん！  
ほんまの事、ゆうてもかめしまへんのや！

**聾の男、静かに立ち上がり、  
テーブルの中心を見つめながら、  
おもむろにマスクを外し、しゃべりだす。**

聾の男： その音は、いつも聞こえていました。私の耳の奥の方で、ずっと鳴り響いていたのです。今も、聞こえています。とても、うるさくてしかたなっかった。闇の底から湧き上がってくるリズムが、私を追い詰め、責め続けるのです。やつらを消去しなければ終わらない。だから、私は、すべてを終わらせる為に、この場所を選びました。

**施設長・職員 A・B・C 婦長・看護婦 A・B・C  
今度は、一斉に、  
「カタ・カタ・カタ・カタ カタ・カタ・カタ・カタ」  
とつぶやき始める。**

**聾の男、前屈みになり、テーブルの中心に向かって、  
自動書記のタイプライターを打ち始める。  
しだいに、速度が加速していく。  
テーブルを弾く音とつぶやきが、同調していく。**

登場人物 6： わては、でんぶ、知ってましてん。しょっぱながら…  
皆はんは、カタリで世の中、渡って来はったお人ばかりや、それは、  
しうがおまへん。仕方のない事だす。この世の中は、どないな事  
してでも、生き残っていかなかん。そうせな、こっちが、いかれ  
ますさかいなあ…。そやけど、みなはん、嘘つくのも大変でんなあ、  
ろばはんの背中、傷ひとつないきれいなもんやし、893番目はん  
は、ほんまは、車椅子なんていらん。なあ、ここらへんで何か、  
でんぶ、すっきりするええ手立ておまへんのかいなあ。  
どなたはんか、ええ考え、教えておくれやす。

**登場人物 6、そう言い切って、椅子を足掛かりに、  
ヒヨイとテーブルの上に乗り、  
トコトコとテーブルの中心へ、  
ポイと身軽に着地する。**

**すべての音と動きが停止する。**

**静寂の中、登場人物 6 が、浮かび上がる。  
フェイスカードを取り出し、  
静かに語りだす。**

**登場人物 6 :** これが、私の皆さんにお伝えできる最後のカミングアウトです。実は、私、共感覚の持ち主です。文字に色を感じたり、音に色を感じたり、形に味を感じたりできるわけです。

**登場人物 6、静止しているテーブルの人々を見渡し、  
観客席に目を向け、見渡す。**

**登場人物 6 :** この会場におられるすべてのひとびとには、それぞれの背景があり、私はひとりひとりに違う色を感じています。同じ色は、ひとつも、ありません。そして、それは虹のように美しい響きを奏でています。誰が、そんな人々を選別し、ひとつの真っ白い巨大な部屋に、閉じ込めたのでしょう。それは、大きな過ちです。やがて、この真っ白な壁は、光の圧力に圧倒されひび割れ崩壊します。その瞬間、すべての光は漆黒の闇に放たれるのです。革命です！

**登場人物 6、ゆっくりとフェイスカードを  
縦に真っ二つに切り裂く。**

**施設長・職員 A・B・C 婦長・看護婦 A・B・C  
一斉に、**

**「ヤクタタズ！・ヤクタタズ！・ヤクタタズ！」  
とつぶやき始める。**

**繰り返され、次第に大きく会場全体に響きだす。**

車椅子の男、聾の男、盲の女、背の低い男、  
トランクから真っ白なテーブルクロスを  
引きずり出し、拡げ始める。

全員が、  
口々につぶやき始め、  
真っ白なテーブルクロスを  
舞台に拡げる。

巨大テーブルクロスは、5間四方。  
舞台一面を覆い尽くす。

もちろん、赤いテーブルも含め、  
椅子もろとも覆われる。

全員が、  
口々につぶやきながら、  
テーブルクロスに吸い込まれて始める。

舞台中央に真っ白な巨大テーブルクロスに  
覆われた得体のしれない塊だけが、  
不気味な存在感で現れる。

誰もいない。

周囲は、闇。

その中から、

「ヒソ・ヒソ・ヒソ・ヒソ　ヒソ・ヒソ・ヒソ・ヒソ」  
と呻き声が聞こえ始める。

繰り返され、次第に大きく響きだす。

得体のしれない塊が、呼応するように、  
膨れ、波打ち始める。

人々の地団駄の音。  
逃げ惑う叫び。

「カタ・カタ・カタ・カタ カタ・カタ・カタ・カタ」  
と唸り出す

辺りが闇に覆われ始め  
得体のしれない塊の内部から  
風が吹き始め

巨大テーブルクロスが、のた打ち回り始める。

内部から閃光が漏れ、  
稲光が走る。  
得体のしれない塊の中で、  
凄まじい嵐が巻き起こる。

得体のしれない塊からは、

**「めつどかくんもたらぼりわ」**

**「ヤクタタズ！」**

**「ケリをつけろ！」**

そして、無数の罵詈雜言。

3つの言葉と、  
様々な言葉が、ノイズと、  
重なり、呼応し、共振し、  
絶え間なく溢れ出し始める。

やがて、

闇が消え

舞台中央に光が満ち溢れる。

とても静かな風景が現れる。

しかし、舞台中央には、  
真っ白い得体のしれない塊だけが、取り残される。

沈黙・黙祷

得体のしれない塊が、胎動し始め、  
8つの椅子を背負った8人が生まれ、  
最後に車椅子の男が、現れる。

真っ白いテーブルが、出現する。

8つの椅子は、テーブルの背後、一直線に並んでいる。  
8つの椅子、上手からの順番。

施設長 = 聾の男（透明の傘）  
看護婦A = 登場人物4（紫色の傘）  
職員B = 登場人物5（藍色の傘）  
看護婦C = 登場人物2（青色の傘）

テーブルの前に車椅子の男。

職員C = 登場人物3（緑色の傘）  
看護婦B = 背の低い男（黄色の傘）  
職員A = 登場人物6（橙色の傘）  
婦長 = 盲の女（赤色の傘）

舞台中央の真っ白いテーブルと、  
その背後に、テーブルを中心シンメトリーに並ぶ椅子。

椅子は、背は、監獄の鉄格子である。

聾の男、盲の女、背の低い男、登場人物 1～6

囚われている。

傘を抱え、背を丸め、膝を抱え、怯えるように、  
鉄格子から観客を覗き見ている。

施設長・職員 A・B・C 婦長・看護婦 A・B・C

看守のように無表情に椅子の横に佇む。

車椅子の男、ゆっくりと車椅子から立ち上がり、  
テーブルの端に腰かけ、観客向かいしゃべりだす。

車椅子の男：ほんだら、しうがおまへん。最後に、ほんまのことといいまひよか。  
実は、わいが、あの…、あの…、あのお方の…  
いや、その前に一服させてもらいます。  
ここは、いっちゃん奥の真っ白な部屋でしゃろ。  
何をしても許されますからなあ…

車椅子の男、シルクハットから煙草（ゴールデンバット）を取り出す。  
おもむろに、火をつけ、一服ふかす。

施設長・職員 A・B・C 婦長・看護婦 A・B・C  
一斉に、声潜めて  
「ハア・ハア・ハア・ハア シーイ」  
とつぶやきを繰り返す。

車椅子の男：この煙草は、いっとき、「金鶴（きんし）」と呼ばれていたんだす。  
金鶴は、文字通りの金色のトビの事だす。無血勝利の象徴だす。  
つまり、この靈鳥が、わいらを導ってくださったですわ。

突然、車椅子が勝手に動き出し、下手に向かう。  
下手端で、方向を観客席に向け、停止する。

**車椅子の背後に、登場人物 1 が現れる。**

**それと同時に、上手に  
理事長（プレゼンター）が、現れる。**

**施設長・職員 A・B・C 婦長・看護婦 A・B・C  
つぶやきが、止まる。**

理事長： みなさん、大変お待たせしました。たった今、すべては、無事完了いたしました。犠牲者が選ばれました。安心して下さい。そして、その犠牲者は、すべて、名前のない人々です。

登場人物 1： もう、ここには、誰もいないよ。

理事長： さあ、始めましょう。最後の晚餐。メインディッシュは、皆様、お待ちかねのキリギリスの素揚げ濃厚香味バター風味です。あの嫌な臭いも、完全消去いたしております。

車椅子の男： そうだす。わいのいっちゃんの好きな物は、水蜜桃だす。ほやけど、ほんまは、真っ赤なリンゴが、いっちゃん好きかもしまへん。

登場人物 1： もう、ここには、誰も来ないよ。

理事長： 私は、別の場所で、育てられました。  
しかし、そこが、本当の私の家でした。

車椅子の男： あの兄ちゃん、どないなりまんねやろな？  
他人さん、殺めたらあきまへん。  
それが、普通のルールだす。あたり前の事でおます！

登場人物 1： もう、ここには…

理事長： 私は、もう、どこにもいません。

車椅子の男： あかんことは、あかん。そやけど、何か、せなあきまへんなあ…

登場人物 6 : 893番はん、結局、わてら、どうなりまんのや？

**その声をきっかけに、**

**聾の男、盲の女、背の低い男、**

**登場人物 2 ~ 6。**

**椅子の上に立ち上がり、**

**両手で傘を握り締め**

**傘の先で、檻の前の看守の頭上に狙いをつける。**

車椅子の男：いや、雪ですわ。こないクソ熱い真夏のど真ん中に、雪降るなんて、けったいな世の中になりましたなあ！もうすぐ、ここはあかんようになりますやろ！このまま、なんもせんといたら、ほんまに…

**椅子の上の 6 人、空を見上げる。**

登場人物 6 : 結局、わてらは、わてら自身で、身、守らなあきまへんのやなあ。

**椅子の上の 6 人、構えた傘を片手に持ち替え、**

**自らの頭上に突き上げて、空に向かって、**

**一齊に傘を広げる。**

**虹がかかる。**

車椅子の男：姉ちゃん、わいらには、わいらを見てくださるもうひとりのお人が、いるんや！ほんで、そのもうひとりのお人は、わいらの顔を見て、わいらの声を聞いてくれはる。

登場人物 6 : そうでつか…、わてにも、そんなお人がひとりおったら、ごっつう、しあわせでしゃろなあ…、ほんなら、わてらだけやのうて、その、もうひとりのお人も、守っていかな、あきまへんなあ！

**椅子の上の 6 人、  
施設長・職員 A・B・C 婦長・看護婦 A・B・C  
それぞれに、傘を差し出し、身を寄せる。**

登場人物 6 : 893番目は～ん。これから、ここは、どうなりまんねやろ？

車椅子の男： 姉ちゃん、ちょっと、待ってや！

**車椅子の男、シルクハットから、  
フェイクカードを取り出し、スマホ検索する。**

車椅子の男： 姉ちゃん、答えは、これに、ちゃんと書いてあるわ！

登場人物 6 : 893番目は～ん。なんて書いておましゃろ？  
ちょっと、読んでみておくれやす？

車椅子の男： よしや、わかったわ！まかしどき！

登場人物 6 : 893番目は～ん。はよ、しておくれやす。  
わてらは、もう、待てまへんねん。

車椅子の男： 読むで！しっかり、聞きや！

**「滅びるね。」 や！**

**車椅子の男、登場人物 1、理事長（プレゼンター）  
同時に、黒い蝙蝠傘を開く。**

舞台一面に、ただ、ただ、静かに雪が降り続ける。

目の前は、真っ白になり、何も見えない。

**緩やかに暗転していく。**

—エピローグ—

## 「劇場」

舞台中央の赤いテーブル。

それ以外は、床も含めてすべてが、白い雪で、覆われている。

テーブルの前中央、観客に向けて一脚の椅子。

その座面には、フェイクカードが、一枚、

黒い面を上にして、アイスピックで突き刺さっている。

背後の赤い円卓が、ゆっくりと立ちあがり始め、

垂直に起立する。

## 停止。

壁の向こうの背景が、青く輝き始める。

すべてのコントラストが、

眩しいほどに、極まり、

頂点に達すると、

しだいに、輝きを失いながら、

徐々に暗くなる。そして、

## 完全暗転。

しばしの静寂。

会場内のスマートフォンに、メッセージ音。

観客は、各々のスマートフォンを開く。

観客席には、無数の光。

スマートフォンの画面の光が、

無数の顔を浮かび上がらせる。

画像、一匹の犬。(ラッキーのようである。)

闇に浮かぶ顔は、皆、同様に笑っている。

そして、笑い顔は、どこかAに似ている。

やがて、画面消去。

静かに再び、闇が訪れる。

了

会場内に客出しの音楽が流れる。

(オルゴール 星に願いを ピノキオより)

会場外、ロビーには、さりげなく

(中島みゆき「命の別名」ドラマ『聖者の行進』より)

が流れ、幾度となく繰り返される。

## 引用文献

『パン売りのロバさん』 作詞：矢野亮  
波多野勤子監修・『イソップ物語』 小学館  
河野与一訳『イソップのお話』 岩波少年文庫

## 使用楽曲

オルゴール「星に願いを」 ピノキオより  
中島みゆき「命の別名」 ドラマ『聖者の行進』 より